

高 松 原 II

— 弥生後期集落を中心とした —

1984.3

長野県立飯田高等学校
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

高 松 原 II

— 弥生後期集落を中心とした —

1984.3

長野県立飯田高等学校
長野県下伊那郡上郷町教育委員会

は じ め に

飯田高等学校長 三 浦 宏

昭和五十六年四月、飯田高等学校に赴任して前校長、牛山之雄先生から引継をしたことの中に老朽の東体育館をとり潰して、本館の東側のテニスコートに新大育館を建設するという大きな事業が含まれていました。さて、テニスコート付近を実測してみますと、どうもこの体育館は大きすぎて建てようがないことが判りました。衆知を集めて、やむなく東体育館や物置などを潰して、そこへ講堂を移転し、講堂の跡地を中心にして建てようと計画しましたが、建物が高いので本館の日陰にもなり授業にも差支えるというので困り果てていましたところ、かねて目をつけていた西体育館の南側の桑畑の地主、吉川唯雄さんが、土地を貸して下さってもよいという御理解をいただくことが出来ました。

しかし、本校は敷地も広いので、とても県では土地を借りてまで建ててはくれまいと若干の諦めもありましたが、本校、教育百年の大計からすれば絶好の場所であり、何とか手だてを考えねばと思って、東原美寅事務長さんほか校内の先生方と鳩首、頭をひねりました。松下逸雄同窓会長（自民党県連幹事長）さんの並々ならぬお力添いで、県の御理解を得てとうとう土地を貸りて建設して下さることになり、多年の懸案が一挙に解決することになりました。

さて、建物を建てるとなると埋蔵文化財発掘調査をしなくてはならぬというわけで、県教委より予算措置していただき学校より上郷町教育委員会（教育長関島昌平氏）にお世話をお願い発掘という段取りになり、調査委員会（委員長上郷町教育委員長 下井稲穂氏）を組織し、大沢和夫先生を顧問に推戴し、地元の考古学者、佐藤勉信先生を発掘調査団長として昨夏（S58）発掘していただいた次第です。天竜河岸段丘上の高燥なこの土地には、やはり縄文、弥生両住居址があり、数々の貴重な埋蔵文化財も発掘され、日本及び下伊那の考古学に新しい一頁を加えました。

格別なる御尽力を頂いた、松下同窓会長さん、地主吉川唯雄さんはじめ上郷町教育委員会、佐藤勉信先生および関係各位に心から御礼申し上げます。 (1984・3・8)

例 言

1. 本書は昭和58年度長野県立飯田高等学校第二体育館建設に伴う下伊那郡上郷町高松原遺跡の昭和51年度グラウンド造成時調査に引続くその西側用地内発掘調査報告書である。
2. 本書は51年度調査資料編を含め総合して編集すべきであるが、時間的制約のため本次調査を主としたものであり、編集は佐藤が担当した。
3. 本書の執筆は環境は岡田、他は佐藤が担当した。
4. 写真は佐藤、遺構実測図は佐藤・牧内、遺物の作図は佐藤・拓影は牧内、遺構・遺物の製図は田口が担当した。
5. 遺構実測図のうちピット内、または横に記してある数字は床面からの深さをcmで、遺物出土状況は床面からの高さをcmであらわし、縮尺は図示してある。
6. 遺物は上郷町歴史民俗資料館に保管してある。

目 次

序	1	2. 掘立柱建物址	32
例 言	2	3. 柱穴群	32
目 次	2	4. 土 壌	33
遺物図目次	3	高松原Ⅱ-土壌一覧表(表3)	35
I 環 境	4	高松原遺跡Ⅱ次調査出土石器一覧表	36
1. 自然的環境	4	(表4)	
2. 歴史的環境	4	IV 集落と遺物の様相	37
3. 上郷町遺跡一覧表(表1)	9	V まとめ	41
II 発掘調査経過	12	遺物図	42
III 発掘調査結果	16	図 版	
1. 住居址	16	I 遺跡 II 遺構	
(1) 縄文時代	16	III 遺物 IV 発掘スナップ	
(2) 弥生時代後期	22	VI 調査組織	
Ⅱ次調査弥生時代後期住居址	31	おわりに	
一覧表(表2)			

挿 図 ・ 遺 物 図 目 次

< 挿 図 >

図1	高松原遺跡地置・地形図及び周辺 …… 5	
	主要遺跡図 (1:30,000)	
図1の2	高松原遺跡地形詳細図 …… 6	
	(1:5,000)	
図2	上郷町遺跡分布図 (1:15,000) …… 13	
図3	高松原第二運動場建設用地内 …… 12	
	- I次調査遺構分布図	
図4	高松原II-Bグリッド土層断面図 …… 17	
図5	高松原II-6列 “ ” …… 17	
図6	“ II-遺構分布図 …… 18	
図7	“ II-2号・3号住居址 …… 19	
	土壌2・3・4・5号	
図8	“ II-4号住居址, 土壌6号 …… 20	
図9	“ “ 5号 “ …… 21	
図10	“ “ 11号 “ , 土壌19号 …… 22	
図11	“ “ 1号 “ , “ 1号 …… 23	
図12	“ “ 6号 “ …… 24	
図13	“ “ 7号 “ …… 25	
図14	“ “ 8号 “ …… 26	
図15	“ “ 9号 “ …… 27	
図16	“ “ 10号 “ …… 28	
図17	“ “ 12号 “ …… 29	
図18	“ “ 13号 “ , 土壌20号 …… 30	
図19	“ II-柱穴群I , 土壌9号 …… 32	
	10号	
図20	“ II-柱穴群II …… 33	
	土壌11・12・13号	
図21	“ II-掘立柱建物址I …… 34	
	土壌7・8・14・15号	
	16・17・18号	

< 遺 物 図 >

図22	高松原II-2号住居址出土遺物I (0:3) …… 42	
図23	“ “ II (0:3) …… 43	
図24	“ - 3号・5号住居址出土遺物 …… 43	
	(0:3)	
図25	“ - 4号 “ (0:3) …… 44	
図26	“ - 11号 “ I (0:3) …… 45	
図27	“ “ “ II (0:3) …… 46	
図28	“ - 柱穴群I・II出土遺物 (0:3) …… 47	
図29	“ - 土壌出土遺物I (0:3) …… 47	
図30	“ “ “ II (0:3) …… 48	
図31	“ - 1号住居址出土遺物 (0:3) …… 49	
図32	“ - 6号 “ (0:3) …… 50	
図33	“ - 7号 “ I (0:3) …… 51	
図34	“ - 7号住居址II …… 52	
	- 8号住居址出土遺物 (0:3)	
図35	“ - 9号住居址出土遺物I (0:3) …… 52	
図36	“ - 9号住居址出土遺物 (0:3) …… 53	
図37	“ - 10号住居址出土遺物I (0:3) …… 53	
図38	“ “ “ II (0:3) …… 54	
図39	“ - 12号 “ I (0:3) …… 54	
図40	“ “ “ II (0:3) …… 55	
図41	“ - 13号 “ I (0:3) …… 55	
図42	“ “ “ II (0:3) …… 56	

I 環 境

1. 自然的環境

長野県下伊那郡上郷町は、長野県の南端を南北に並走する赤石山脈と木曾山脈の間にある飯田盆地のほぼ中央に位置する。この地域は天竜川とその支流によって形成された河岸段丘上に、往古から人々の生活跡がみられる。

高松原遺跡は上郷町下黒田の小学高松原・高松・イカニ洞及び南原の一部を含む一帯に所在する。遺跡は長野県立飯田高校の敷地を中心に、北は上郷小学校、南は段丘先端、東は御殿山の手前を南流する小川、西は飯田高校グラウンド端までの12万㎡にわたる。その海拔高度は478～486mである。遺跡は段丘上に形成された小扇状地の一角に立地し、その地目は宅地を中心にグラウンド及び畑からなっている。この段丘と天龍川との比高差は81～89mである。

伊那谷の段丘は、『下伊那の地質解説』によれば、火山灰を基準にして高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・低位段丘Ⅱに編年されている。上郷町の段丘は、洪積土壌の分布する中位段丘・低位段丘Ⅰ及び沖積土壌のみられる低位段丘Ⅱに区分される。前二者は俗に上段と呼ばれている黒田地帯であり、後者は下段の飯沼・別府地区にあたる。低位段丘Ⅱは天龍川の現河床との比高3mを測る海拔400～405mの南斜面、それとの比高差2mの海拔407～418mの別府面、その一段上の海拔420～430mの飯沼面に細分される。これら低位段丘Ⅱ地帯は、湧水が豊富で地下水も高く、沼沢的な凹地が多くみられ、典型的な水田地帯である。

高松原遺跡の立地する地帯は、低位段丘Ⅰのba面、いわゆる伊久間面にあたる。下段baの桐林面に相当する狭い小段丘との比高差が30～50mあり、急峻な段丘崖をもつ台地である。遺跡一帯の土壌を発掘調査時の層序で見ると、耕作土下に黒色土・褐色土・ローム層・砂礫層の順で堆積され、地下水位の低さと相まって乾燥台地の特徴を示し、昔より今に至るまで農地としての土地利用は畑である。

次に、上郷町の気象状況を『下伊那誌気象編』で見ると、昭和28年から40年の年平均気温は13℃台、最暖月の8月の平均気温は25℃台、最寒月の1月の平均気温は1℃である。これは下伊那の気温分布をみた時、天龍南部の平岡地区に続いて暖かい地域と言える。また、年降水量は高陵中学の観測で1631mm、下伊那地方では他地区に比較して少ない方である。さらに、風向きは季節による変化はあるものの、最多風向は西寄りの風が強く、日照時間は地形による地域差があるとは言え長い方である。以上のように、気象面から推察しても、当該地区は人類の居住に適した場所と言えよう。

2. 上郷町の遺跡と歴史的環境

上郷町の遺跡は大正13年、鳥居龍藏博士が『下伊那の先史及び原始時代図版』を編纂するのに先立ち、市村成人氏と部下を探訪調査してから特に知られるようになった。戦後は市村成人・大澤和夫両氏を中心に『下伊那史第二・三巻』、『信濃史料第一巻』及び『全国遺跡地図長野県版』を刊行する過程で、町内の遺跡や古墳の数を明確にしてきた。その後、昭和40年代後半に飯田高校考古学研究会（代表片山徹）が

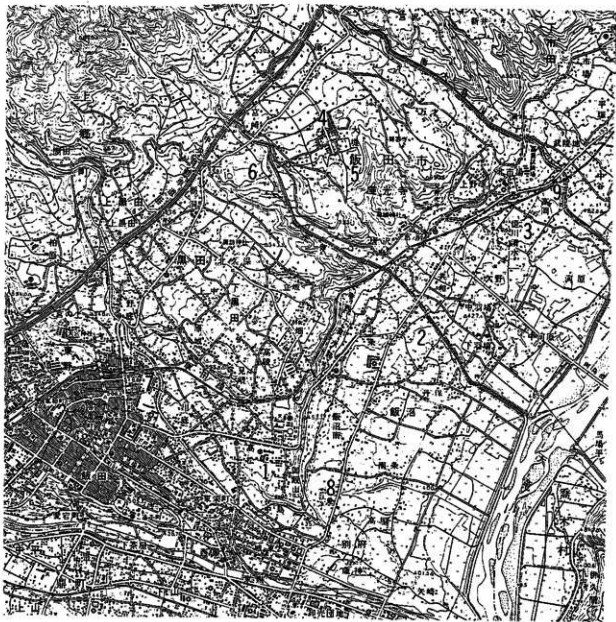


図1 高松原遺跡位置・地形図及び周辺主要遺跡図 (1:30,000)

- 1……高松原, 2……宜榎外, 3……恒川遺跡群, 4……照光寺原, 5……中島
 6……大明神原, 7……大門町, 8……雲影寺古墳, 9……高岡1号古墳



図1の2 高松原道跡地形詳細図 (1:5,000)

上郷町全域の分布調査を行ない、正確な遺跡地図を作成して、遺跡数68カ所・古墳32基を発表した。これは実地踏査の上、遺跡を小字名毎に分割命名しており、研究者の間で利用価値の高い資料として注目されたものである。

昭和50年代に入ると、この分布図をもとに今村善興氏が「上郷史」で、また、岡田が「長野県史考古編」で遺跡分布図一覽表の作成にあたった。中でも昭和57年度には、上郷町教育委員会が調査主体者となり、「公共事業の計画実施や宅地造成の急激に進む中で、埋蔵文化財包蔵地の保存対策の必要性から、遺跡の所在を確認して開発事業に対処すると共に、学術的にも役立つ基本資料を得よう」との目的で、全町内の遺跡詳細分布調査を実施したのである。調査員には岡田・片山・下田の三人がなり、全町民の協力のもとに、一筆毎に踏査する非常に綿密な分布調査を行なった。この調査結果を、上郷町の歴史的環境として、『堂垣外遺跡』誌上に発表した拙稿があるので、それを転載し、当該地域を概観してみたい。

上郷町所在の遺跡は一般遺跡69カ所・古墳32基・中世の城跡3カ所の合計104遺跡である。一般遺跡を時代別にみると、縄文時代50、弥生時代47、古墳時代21、奈良・平安時代65、中世42を数えるが、単純遺跡は少なくその大半が複合遺跡である。ちなみに単純遺跡は縄文時代で2カ所、奈良・平安時代4カ所の6カ所しかなく、先住民がこの地を何回も利用していたことがわかる。

上郷町の歴史の変遷を概観してみると、現在のところ1万年以前の旧石器時代の遺跡・遺物はない。最古の文化内容を持つものとしては、縄文時代草創期に比定される上黒田の姫宮遺跡出土の表裏縄文土器破片があるほか、柏原A遺跡出土の石器剥片が目目されるだけである。次の縄文早期関係では、堂ヶ入・八王子・姫宮・米ノ原・見城垣外遺跡等から、押型文土器や織維を含む条痕文土器及び撫糸文土器が出土し町内でも比較的山寄り地帯に古い時期の生活跡を認めることができる。さらに約6000年前の縄文前期の遺跡は、八王子・姫宮・日影林・米ノ原・北ノ原・社宮寺原・大明神原・高松原の8遺跡である。いずれも上段の中段段丘と低位段丘I地帯にしかなく、今回の表面採集結果からみて、下段の飯沼・別府地域にまでは未だ前期の集落は発達していなかったことが想定される。しかし、次の縄文中期になると、低位段丘II地帯の南条面下段を除き、全地域内に遺物の散布がみられ、生活舞台の拡散化が目立ち始める。中期の遺跡49カ所中、その代表的遺跡は上黒田の日影林・八幡原、下黒田の栗屋元・大明神原、別府の中島、矢崎、飯沼丹保の堂垣外遺跡等であり、中でも栗屋元・大明神原遺跡は上郷町を代表する重要遺跡である。この後に続く約3000～4000年程前の縄文後期には、今までの繁栄ぶりとは裏腹に遺跡数も遺物量も極端に減少する。町内で現在判明している遺跡は、上黒田の八王子・姫宮・八幡原・町張・下黒田の栗屋元・大明神原・高松原及び別府の中島の8遺跡である。縄文時代最終末の晩期に關係する遺跡は現在3カ所知られている。それは東海系の条痕文土器片を出土する上黒田の姫宮・平畑及び別府の中島遺跡である。ただ、南条の丸山俊一氏所蔵の独石石は、縄文時代後期乃至は晩期にみられる祭器であり、藪越遺跡出土品との話から、この周辺一帯も注目したい。

次の水稲栽培を經濟基盤とする弥生文化の下伊那への波及は、弥生前期末のことであり、美濃・尾張・三河方面から東漸したものと考えられている。弥生時代600年間は、前期・中期・後期と三区別されるが上郷町内47カ所の遺跡は大半が後期に属し、中期の遺物出土地は現在のところわずかである。下伊那での前期土器は、豊丘村林里遺跡出土品を標式とする林里式土器で、東海地方の前期に比定される西志賀式土器を伴出する。この種の土器は現在上郷町では発見されていない。次の弥生中期は下伊那では土器の形式編年で四分割している。中期初頭に比定される飯田市松尾寺所遺跡を指標とする寺所式、喬木村阿島五反田遺跡をタイプステーションとする阿島式、高森町下市市北原遺跡を標式とする北原式、中期末葉に位置づけられる飯田市座光寺恒川遺跡及び上郷境の土曾川に近接する座光寺正泉寺遺跡出土の土器を指標とする恒川式である。この時期の町内遺跡としては寺所式土器片を出土した丹保の堂垣外遺跡、阿島式土器片

の発見があった飯沼北の的場遺跡、北原式土器を出土する丹保遺跡、恒川式土器片を出す南条の蔽越遺跡のほか、別府の中島・ドドメキ・下黒田の高松原・目光原及び上黒田の五本木遺跡等々9遺跡が挙げられる。特に該期の遺跡の大半は下段の飯沼・別府地籍にあることから、低位段丘Ⅱ地帯を中心として、更に発見される可能性が高い。後続する弥生後期200年間を、下伊那では座光寺原期と中島期に編年する。前者は飯田市座光寺原遺跡出土の土器を標式とする時期であり、後者は同じく座光寺中島遺跡出土品を指標とし、共に下伊那の段丘区分で言う低位段丘Ⅰの伊久間原面に立地する。ここは高燥段丘でその生産様式も低位段丘Ⅱの飯沼面の如き低湿地帯とは異なり、単純に水稻耕作は考えられず、陸耕乃至は畑作等を考慮すべき地域である。この時期、長野県下は千曲川水系の箱清水式文化圏と天龍川水系の中島文化圏の小国に分かれていたが、その根底には生産様式の相違が認められる。上郷町内の弥生後期の遺跡は、実に44カ所、中期と重複するもの6カ所を含めて山麓の上黒田八王子遺跡から天龍川氾濫原に接する別府の高屋下、丹保の蔽上遺跡まで町内全域に広がっている。この時期の代表的遺跡は、下黒田の高松原遺跡と堂垣外遺跡を指呼のうちみる飯沼の丹保遺跡及び南条の蔽越遺跡が著名である。

古墳時代は集落址と墓域とに区別される。上郷町の古墳は煙滅古墳を含めて32基、その大半が別府台地端に並び、一部下黒田地籍と飯沼北に散在する。いずれも後期古墳と想定され、天神塚古墳と番神塚古墳の2基を除いて円墳である。この時期の土器散布地は21カ所あり、うち14カ所は別府・飯沼地籍に所在する。その主要遺跡は南条の蔽越遺跡と飯沼北の的場遺跡である。前者は和泉期と鬼高期の、後者は鬼高Ⅱ期の土器を多量に出土し注目されている。この古墳と集落のあり方から見れば、大和朝廷時代の上郷は下段の経済的基盤豊かな地を豪族が占拠し、周辺一帯を支配しながら、次の時代にまでその権力を引き継いでいったものと推定される。

次の奈良・平安時代の遺跡数は町内に64カ所あり、4遺跡を除いて複合遺跡である。この時期の遺物は町内全域から発見されるが、中でも下段は大集落址が予想される地域である。例えば、別府と飯沼境を流れる栗沢川右岸にある高屋遺跡、座光寺との境界をなす土曾川右岸の堂垣外遺跡は、多量の須恵器片が散布し、上郷の歴史時代の二大重要遺跡である。この低位段丘Ⅱ地帯は、座光寺地区においても奈良・平安時代の遺物の散布が多く、今日、伊那郡番址とはほぼ断定される恒川遺跡群と段丘面は同一である。しかも飯沼地区は古代条里制遺構の存在を地割と地名から推測できるのに対し、上段地帯にはその確証がなく、古墳時代以降の中心的集落や水田址は、下段に求めざるを得ないようである。平安末期の1144年に作られた『伊呂波字類抄』に普光寺縁起が記されているが、それにはこの地方の郷名が登場する。

「推古十年信濃人若麻績東人、獲仏像於難波堀江、安之麻績郷宇沼邑、後徒水内郡今普光寺是也」。

つまり、麻績郷宇沼邑とあるのがそれで、現在の座光寺高岡付近から上郷町南条近辺一帯の低平な沼沢地帯をさし、現在の飯沼は宇沼が転化したものと言われている。また、この地域には伊那郡番を経て国府に至る官道東山道が通過していたと考えられ、飯沼・別府・座光寺一帯は相当の文化高揚地帯であったと推定される。以上、みてきたような自然的・歴史的環境の中に高松原遺跡は立地しているのである。

参考文献

- 下伊那地質誌編集委員会編『下伊那の地質解説』（昭和51年8月）
- 下伊那教育会編『下伊那誌 気象編』（昭和59年1月）
- 飯田高校考古学研究会編『考古学研究会誌第1号』（昭和47年7月）
- 長野県飯田高等学校高松原遺跡調査団『高松原』（昭和52年3月）
- 上郷町教育委員会『飯沼遺跡』（昭和57年2月）
- 上郷町教育委員会『上郷町遺跡詳細分布調査カード』（昭和58年3月）
- 上郷町教育委員会『堂垣外遺跡』（昭和58年9月）

3. 上郷町遺跡一覧表(表1)

(昭和58年3月31日現在, 遺跡番号は町登録番号)

番号	種別	時代					名称	所在地	地目	備考
		縄文	弥生	古墳	奈・平	中世				
1	包蔵地	○			○		堂ヶ入 遺跡	上黒田 堂ヶ入	山林	
2	"	○			○		八王子 "	" 八王子	山林・原野	
3	"	○		○	○		姫宮 "	" 姫宮	畑・原野・宅地	昭和55年調査
4	"	○			○		日影林 "	" 日影林	" 田 "	
5	"	○	○		○		柏原 A "	別府 柏原	" 墓地 "	
6	"	○					" B "	" " "	" " "	
7	"	○			○		" C "	" " "	" " "	
8	"	○	○		○		八幡原 "	上黒田 八幡原	" 田 "	
9	"	○	○		○		粟節前 "	" 粟節前	" 山林	
10	"	○	○		○		米ノ原 "	" 米ノ原	" "	
11	"	○	○		○	○	平畑 "	" 平畑	" 宅地	
12	"	○			○		町張 "	" 町張	" 田 "	
13	"	○	○		○	○	赤板 "	" 赤板	" " "	昭和45年調査
14	"	○	○		○	○	五本木 "	" 五本木	" " "	
15	"	○					北ノ原 "	下黒田 北ノ原	" "	
16	"	○	○		○	○	社宮司原 "	" 社宮司原	" "	
17	"		○		○		宮下 "	" 宮下	畑 "	
18	"	○	○	○	○	○	ツルサシ "	" ツルサシ	" 田 "	
19	"	○			○	○	ミカド "	" ミカド	" " "	
20	"	○			○	○	増田 "	" 増田	" "	
21	"	○			○	○	今村 "	" 今村	" "	
22	"	○		○	○		見城垣外 "	" 見城垣外	" " "	
23	"	○	○		○	○	栗屋元 "	" 栗屋元	" " "	
24	"	○			○	○	北垣外 "	" 北垣外	" " "	
25	"	○	○		○	○	原の城A "	" 原の城	" "	
26	"	○	○		○	○	" B "	" " "	" " "	
27	"				○		福島 "	" 福島	" 田 "	
28	"	○	○		○	○	垣外 "	" 垣外	" " "	
29	"	○	○	○	○	○	大明神原 "	" 大明神原	" 山林 "	
30	"	○	○		○	○	桜畑 "	" 桜畑	" 田 "	
31	"	○		○	○	○	靉垣外 "	" 靉垣外	" " "	
32	"	○	○	○	○	○	砂原田 "	" 砂原山	" "	
33	"		○		○		中畑 "	" 中畑	" 田 "	

番号	種別	時代					名称	所在地	地目	備考
		縄文	弥生	古墳	奈・平	中世				
34	包蔵地	○	○		○	○	三反田 遺跡	下黒田 三反田	畑・田・宅地	
35	"	○	○	○	○	○	高松原 "	" 高松原 "	" "	昭和51・58年調査
36	"	○	○		○		目光原 "	" 目光原 "	" "	
37	"	○	○		○	○	川底 "	別府 川底 "	田 "	
38	"	○	○	○	○		DF×キ "	" DF×キ "	" "	
39	"	○	○	○	○	○	中島 "	" 中島 "	" "	
40	"	○	○		○	○	化石 "	" 化石 "	" "	
41	"	○	○	○	○	○	宮垣外 "	" 宮垣外 "	" "	
42	"	○	○	○	○	○	矢崎 "	" 矢崎 "	" "	
43	"					○	兼田 "	" 兼田 "	" "	
44	"					○	渡場 "	" 渡場 "	" 宅地	
45	"		○	○	○	○	高屋下 "	" 高屋下 "	" "	
46	"	○	○	○	○	○	高屋 "	" 高屋 "	" "	
47	"		○			○	棚田 "	飯沼南条 棚田 "	" "	
48	"					○	竹ノ内 "	" 竹ノ内 "	" "	
49	"	○	○	○	○	○	北浦 "	" 北浦 "	" "	
50	"	○	○	○	○	○	びくに畑 "	" びくに畑 "	" "	昭和57年調査(試掘)
51	"	○	○		○	○	一丁田 "	" 一丁田 "	" "	
52	"	○	○	○	○	○	藪越 "	" 藪越 "	" "	昭和57年調査(試掘)
53	"	○	○	○	○	○	雲彩寺 "	" 雲彩寺 "	" "	
54	"		○	○	○	○	堀尻 "	" 堀尻 "	" "	
55	"	○	○			○	南原 "	飯沼南 南原 "	" "	
56	"		○			○	ヒエ田 "	" ヒエ田 "	田 "	
57	"	○				○	芝崎 "	" 芝崎 "	" "	
58	"					○	御蔵前 "	" 御蔵前 "	田 "	
59	"		○	○	○	○	的場 "	飯沼北 的場 "	" "	昭和41年調査
60	"					○	釜ノ口 "	" 釜ノ口 "	田 "	
61	"					○	院下 "	" 院下 "	" "	
62	"	○	○			○	西浦 "	" 西浦 "	田 "	
63	"	○	○			○	ママ下 "	" ママ下 "	" "	
64	"	○	○	○	○	○	堂垣外 "	飯沼丹保 堂垣外 "	" "	昭和58年調査
65	"		○	○	○	○	丹保 "	" 中島 "	" "	
66	"		○			○	矢劍 "	" 矢劍 "	" "	
67	"		○			○	橋爪 "	" 橋爪 "	" "	
68	"		○			○	長橋 "	" 長橋 "	" "	
69	"		○			○	藪上 "	" 藪上 "	" "	
70	古墳			○			浅間塚 "	下黒田 浅間塚2479 "	山林	

番号	種別	時代					名称	所在地	地目	備考
		縄文	弥生	古墳	奈良	中世				
71	古墳			○			不二塚古塚	飯沼南 フジ塚3205	宅地・山林	
72	"			○			塚田 "	飯沼北 ツカ田2759	田	
73	"			○			門前 "	" 門前2499の1	原野	別称鶴足院古墳
74	"			○			天神塚 "	飯沼南象天神塚3334	墓地・山林	" 雲彩寺古墳
75	"			○			中しま "	" 中島 3259	"	" 中島第11号古墳
76	"			○			化石第1号 "	別府 化石1729の1	"	" 血とり場の塚
77	"			○			化石第2号 "	" " 1741	"	
78	"			○			番神塚 "	" 北村1683	宅地・畑	
79	"			○			水口の塚 "	" 水口1327	原野	旧 溝口の塚
80	"			○			弓矢 "	" 弓矢1240	宅地	
81	"			○			川底 "	" 川底		
82	"			○			ドドメキ第1号 "	" ドドメキ2245	宅地	
83	"			○			" 2号 "	" " 2231	"	
84	"			○			" 3号 "	" " 2226	"	
85	"			○			" 4号 "	" " 2222	"	
86	"			○			聖賢塚 "	" 横戸2191	畑・田	
87	"			○			中島第1号 "	" 中島2170	宅地	
88	"			○			" 2号 "	" " 2165	"	別称玄関塚古墳
89	"			○			" 3号 "	" " "	"	
90	"			○			" 4号 "	" " "	"	
91	"			○			" 5号 "	" " 2059	畑	
92	"			○			" 6号 "	" " 2055	原野	別称藤塚古墳
93	"			○			" 7号 "	" " 2064	宅地	
94	"			○			" 8号 "	" " 1791	"	
95	"			○			" 9号 "	" " 1792	"	
96	"			○			" 10号 "	" " 1794	畑	
97	"			○			中井 "	" 中井1838	宅地・神社	別称天王原の塚
98	"			○			庚申原 "	" 庚申原1366D3	畑	" つくね塚
99	"			○			宮の前垣外 "	" 宮の前垣外1194	宅地	
100	"			○			鳥屋場 "	" 鳥屋場 750	墓地	
101	"			○			久保 "	" 久保 782	"	
102	城跡				○		原の城跡	下黒田 原の城	畑・宅地・山林	
103	"				○		飯沼城跡	飯沼南 電坂森	" " "	
104	"				○		古城跡	" 古城	" " "	

II 発掘調査経過

昭和58年度、長野県立飯田高等学校第二体育館が上郷町黒田395-3番地に建設されることになった。この用地は高松原遺跡の一環となっている。

この用地東に接する飯田高校第二運動場は、その建設時、昭和50年10月14日～11月20日の日曜日、祝祭日を利用し、遺構確認調査をなし、弥生後期住居址8軒と、1基の竪穴の存在が確認された。このため51年3月、大沢和夫を団長とする調査団を組織し、3月8日～4月4日までと、4月、5月の日曜日、祝祭日を利用した春季調査が行われ、7月20日～9月5日までの夏季調査が実施された。

調査結果、弥生後期では住居址35軒・土壊2基・掘立柱建物址8基・囲溝遺構2基と縄文中期土壊85基が発掘され、これら時期の遺物の多くの出土をみ注目される。その報告書「高松原-伊那谷弥生後期集落の研究(本文編)1977・3」が飯田高等学校・高松原遺跡調査団によって刊行されている。(図3参照)

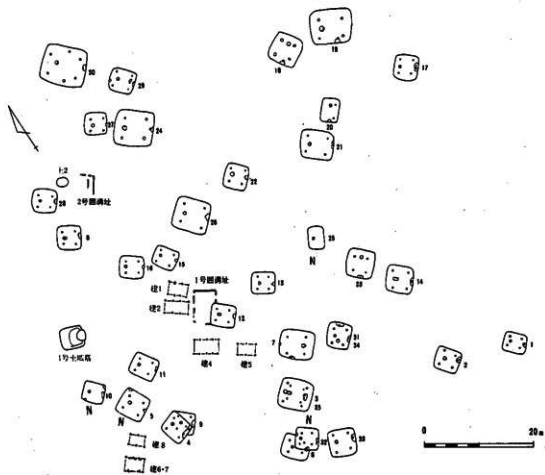
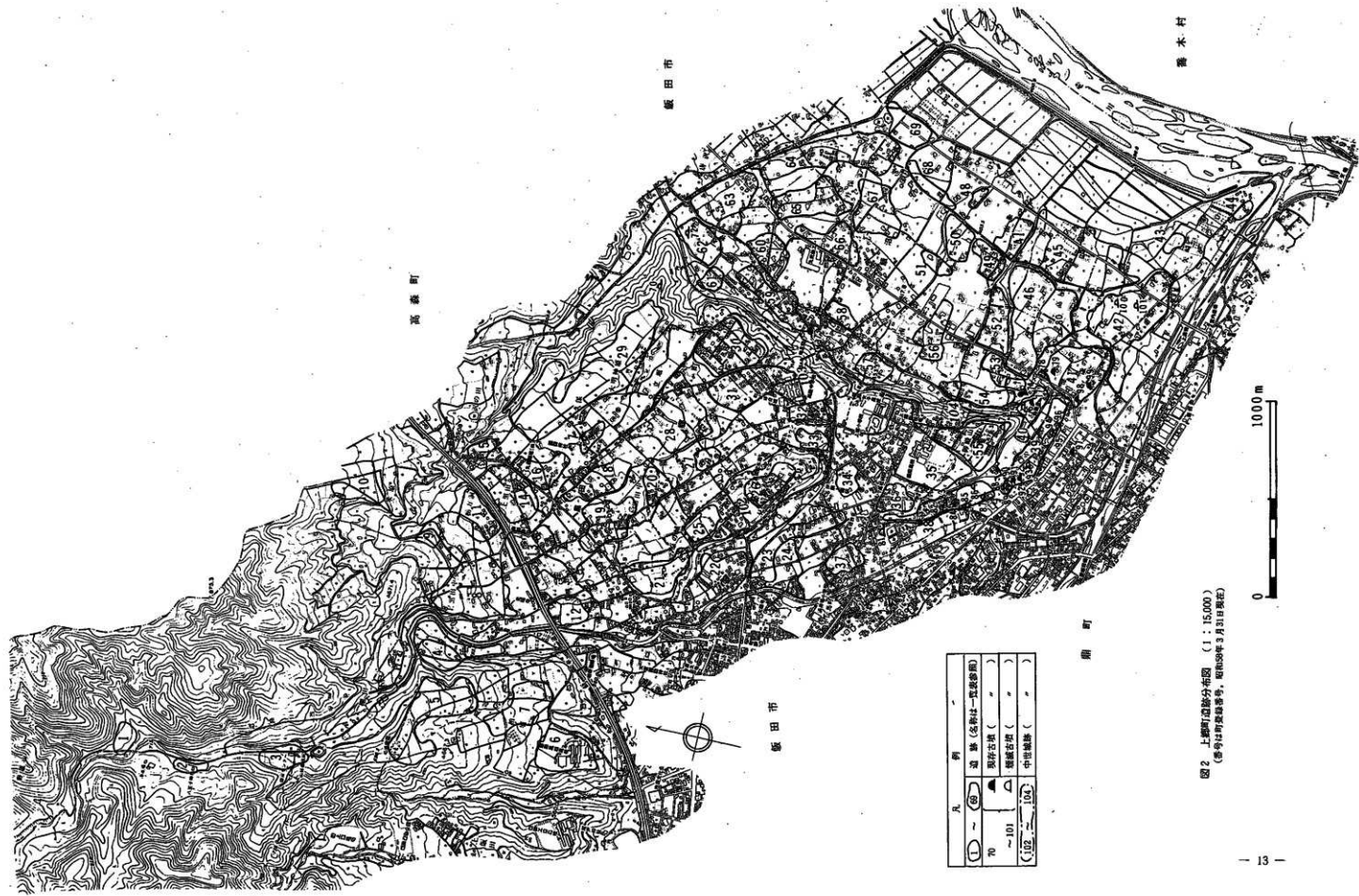


図3 高松原第二運動場建設用地内Ⅰ次調査遺構分布図
(N…中島式住居址) (「高松原-本文編」1977・3による)



①	遺跡 (名称は一環線参照)
②	遺跡 (名称は一環線参照)
③	遺跡 (名称は一環線参照)
④	遺跡 (名称は一環線参照)
⑤	遺跡 (名称は一環線参照)
⑥	遺跡 (名称は一環線参照)
⑦	遺跡 (名称は一環線参照)
⑧	遺跡 (名称は一環線参照)
⑨	遺跡 (名称は一環線参照)
⑩	遺跡 (名称は一環線参照)
⑪	遺跡 (名称は一環線参照)
⑫	遺跡 (名称は一環線参照)
⑬	遺跡 (名称は一環線参照)
⑭	遺跡 (名称は一環線参照)
⑮	遺跡 (名称は一環線参照)
⑯	遺跡 (名称は一環線参照)
⑰	遺跡 (名称は一環線参照)
⑱	遺跡 (名称は一環線参照)
⑲	遺跡 (名称は一環線参照)
⑳	遺跡 (名称は一環線参照)
㉑	遺跡 (名称は一環線参照)
㉒	遺跡 (名称は一環線参照)
㉓	遺跡 (名称は一環線参照)
㉔	遺跡 (名称は一環線参照)
㉕	遺跡 (名称は一環線参照)
㉖	遺跡 (名称は一環線参照)
㉗	遺跡 (名称は一環線参照)
㉘	遺跡 (名称は一環線参照)
㉙	遺跡 (名称は一環線参照)
㉚	遺跡 (名称は一環線参照)
㉛	遺跡 (名称は一環線参照)
㉜	遺跡 (名称は一環線参照)
㉝	遺跡 (名称は一環線参照)
㉞	遺跡 (名称は一環線参照)
㉟	遺跡 (名称は一環線参照)
㊱	遺跡 (名称は一環線参照)
㊲	遺跡 (名称は一環線参照)
㊳	遺跡 (名称は一環線参照)
㊴	遺跡 (名称は一環線参照)
㊵	遺跡 (名称は一環線参照)
㊶	遺跡 (名称は一環線参照)
㊷	遺跡 (名称は一環線参照)
㊸	遺跡 (名称は一環線参照)
㊹	遺跡 (名称は一環線参照)
㊺	遺跡 (名称は一環線参照)
㊻	遺跡 (名称は一環線参照)
㊼	遺跡 (名称は一環線参照)
㊽	遺跡 (名称は一環線参照)
㊾	遺跡 (名称は一環線参照)
㊿	遺跡 (名称は一環線参照)

図2 上野町遺跡分布図 (1:15,000)
 (番号は同図番号, 昭和50年3月31日現在)

昭和51年度調査結果からみて第二体育館建設用地1800㎡は第二運動場に隣接し、遺跡の一端をなすため、飯田高等学校は上郡町教育委員会に調査を委託し、本次調査が実施されたものである。

発掘調査日誌

- 昭和58年7月22日、高松原調査委員会を組織し、委員会を開き、調査についての打合わせを行う。
- 7月24日(雨) 雨の中を終日、用地内の桑株切りを行う。
- 7月26日(晴、あつい) 器材・テントを運び、テント設置、桑株片付け、グリッド東より西へA・B……L列、南より北へ1.2…33列を設定する。
- 7月27日(晴、曇り) B5～B33と5列B～K列グリッド調査、5列各グリッドに遺構あり、B28～31に弥生後期住居址の存在を認める。
- 7月28日(晴、曇り) 14列・33列グリッド調査、I33・J33に住居址あり。B列とB6～J6列の断面調査図。
- 7月29日(晴、曇り) 35列・37列にグリッド拡張調査。10時より重機はいり、南側より表土の排除作業。1号・2号住居址プラン検出。
- 7月30日(晴、4時すぎ雷雨) 1号・2号住居址調査。土壌1号検出掘上げ、2号住居址北に石組炉址を検出する。重機1日排土作業。
- 7月31日(晴) 日曜日休み。
- 8月1日(雨) テント移動位置を決め、移動準備をなし、雨のため引き上げる。
- 8月2日(晴、曇り) 1号住居址完掘、写真、測量。2号住居址調査。3号住居址を検出、調査。重機終日排土作業。
- 8月3日(晴、曇り) 2号・3号住居址完掘、測量。2住内に土壌5号あり、深く中ほどより縄文前期末土器3分の1個体あり、2住出土土器とあう。2住は被災の住居址。土壌5は2住の内部施設ともみる。3住は壁はなく、集石炉とみるが、調査は後日にまわす。土壌2・3・4号検出、完掘。4号・5号住居址検出(縄文中期)、5住掘り上げ。6号・7号住居址プラン検出。重機終日排土作業。
- 8月4日(晴、曇り) 4号住居址完掘、4住・5住測量。6住・7住調査。8号住居址検出。重機排土作業終わり、3時半に帰る。
- 8月5日(晴) 休み
- 8月6日(晴、曇り) 6住は掘り上げる。欠山式土器出土、埋燵炉をもつ。7住深く、大形(座光寺原式)。8住は掘り上げる。土器は少なく、ガラス玉1個の出土をみる。
- 8月7日(晴) 日曜日休み
- 8月8日(晴) 7住完掘、測量。6住炉址たち割り調査。9号住居址(座光寺原式)検出、調査。東側の柱穴群調査一全面の排土作業。
- 8月9日(晴、あつい、4時より雷雨はげし) 8住完掘、測量。9住完掘、測量。10号住居址を検出、東境にあり排土作業。柱穴群I調査、柱穴内に磨石鉄未製品2個の出土をみる。
- 8月10日(晴) 10住の調査、2分の1以下で排水溝にかかり調査不能。座光寺原式土片2個体分がバラバラとなって出土。土壌6号検出、深く掘るに苦労す、縄文後期土器片出土。柱穴群I調査、柱穴群II検出。11号住居址検出、調査(縄文中期中葉前半)。北側の排土作業。
- 8月11日(晴、曇り) 10住完掘、測量。11住掘り上げ、被災の小さな穴で周囲に柱穴をもち、遺物多

し。土壌6号掘り上げ、測量。柱穴群Ⅱ調査。土壌7・8・9号検出。

8月12日(晴、暑い) 12号・13号住居址のプラン検出にかかる。土壌7・8・9号完掘、土壌10～19号検出調査。建物址Ⅰ検出完掘。

8月13日(晴、暑い) 作業員午前中で休み。12住・13住調査。柱穴群Ⅰ・Ⅱ、建物址Ⅰの測量。土壌10～19号完掘測量。盆休みを14日～16日とし、テント周辺整備する。

8月15日(晴、夕方より台風5・6号風雨) 測量残りのレベルをとり、全体写真撮影。

8月16日(晴、10時ごろより台風5号雨) 午前、台風に備えテントの補強。

8月17日(雨) 休み。

8月18日(曇り、にわか雨多し) 12住完掘(座光寺原式) 遺物多し、測量。13住(座光寺原式) 被火の住居址、遺物多く、調査手間どる。土壌20検出、調査。

8月19日(晴) 13住・土壌20完掘、測量、全面写真撮影。テント・器材を撤収する。

8月20日(晴) 13住火災跡の調査、12住・4住の炉址たち割り調査、3住の集石炉とみるをたち割り調査、上部にのみ集石、内部は灰と炭が充満する。
現場作業を終了する。

9月4日(晴) 遺構分布図、レベル原点の修正をなす。

現場作業終了後、遺物の整理、復元作業、遺構図の整理、遺物実測、製図をなし、報告書作成にとりかかる。

Ⅲ 発掘調査結果

第二体育館建設用地は南北72m×東西25mの範囲にあり、北が高く緩い傾斜をもって南に下がる。その比高差は180cmを測る。かつては農協の稚蚕飼育桑園であったため深耕されており、土層断面図(図4・5)にみるように30～40cmの耕土をもち、その下に褐色土・黒色土層があってローム層となるが、桑の植え溝がローム層に達しているところもあり、西側の川に面した所では耕土下がローム層となり、遺構が荒れ、検出不能となっていた。全体的には表土からローム層まで60～70cmの深さがあり、遺構はローム層に掘りこまれていた。

高松原遺跡において本次発掘調査された遺構は次のようである。(図6)

1. 住居址13軒一縄文前期末2、縄文中期中葉3、弥生後期8。
2. 建物址 1
3. 柱穴群 2
4. 土 壌 20

本次調査の遺構番号には1次調査と区別するため、Ⅱ-を付すことにした。

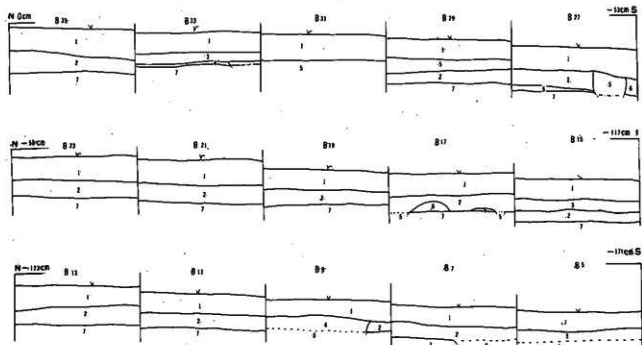


図4 高松原Ⅱ-B列グリッド 土層断面図

- 1.暗黒色土(粘土), 2.褐色土, 3.黒色土(褐色土の覆り), 4.暗褐色土,
5.黒色土, 6.黄褐色土, 7.ローム層

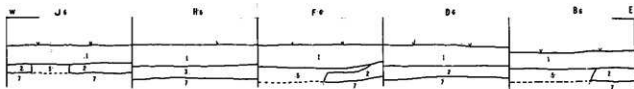


図5 高松原Ⅱ-6列グリッド 土層断面図

- 1.暗褐色土(粘土), 2.褐色土, 3.黒色土(褐色土の覆り), 5.黒色土, 7.ローム層



1. 住居址

(1) 縄文時代

Ⅱ-2号住居址(図7)

K11グリッドに発見され、北にⅡ-3号住居跡が隣接する。南北4.15×東西3.5mの楕円形をなし、北と西で10cm、南と東で20cmローム層に掘りこむ縄文前期末の壑穴住居址である。火災にあっており、覆土断面図でみるように覆土下層は木炭・灰を多く含む暗黒色土であり、床面は堅く、焼土が多くみられる。主柱穴は4個とみられ壁に沿っており、南壁に付いて浅い掘りこみがあり、その中に深い柱穴が付く。炉址は中心よりやや北に寄っており、石囲炉であったとみられ、石の抜かれた痕跡を残す。東壁に接し土境

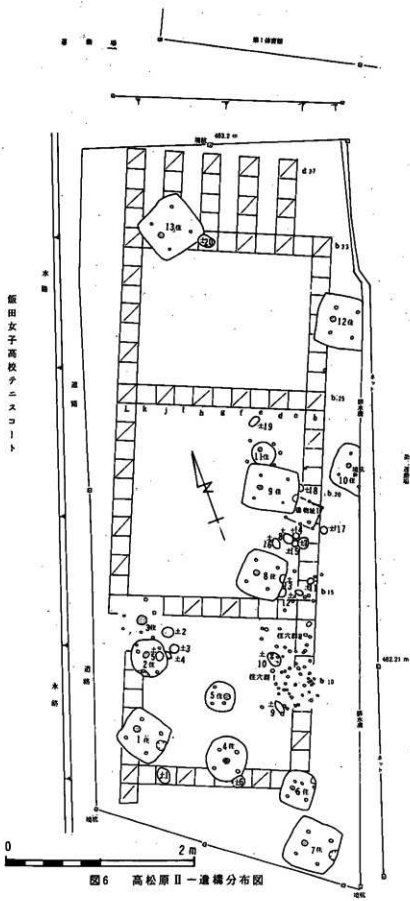


図6 高松原Ⅱ一遺構分布図

5号とした径100~105cmの円形、深さ95cmの掘りこみがあり、その中間の壁について図22の1の土器3分の1が出土し、同一土器が掘りこみ上層と炉址南側床面に出土し、このため独立した土壇とみるより、本址に付く貯蔵穴的な施設と考えられる。土壇5号の東に壁を切って土壇4号があるが、遺物はなく、その形態からみると住居址に付くものとみられるが、はっきりとした決め手はもてなかった。

遺物(図22・23) 1の深鉢は4山の大きな波状をなす口縁部は大きく外反し、頸部からしまつて筒形の胴部となるが底部を欠く。口縁部文様は横位の竹管文を地文に口縁直下に2条、これより下がる3条・

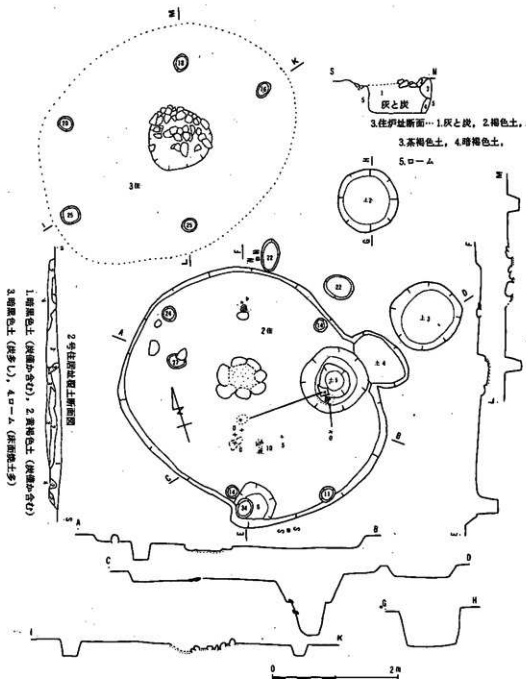


図7 高松原II-2号・3号住居址, 土壇2号・3号・4号・5号

4条・5条を組とする縦の、頸部をめぐらす1条の結節状浮線文で飾り、胴部は縦の羽状竹管文が施されている。3・5～7も同一系の土器であり、諸磯C式である。

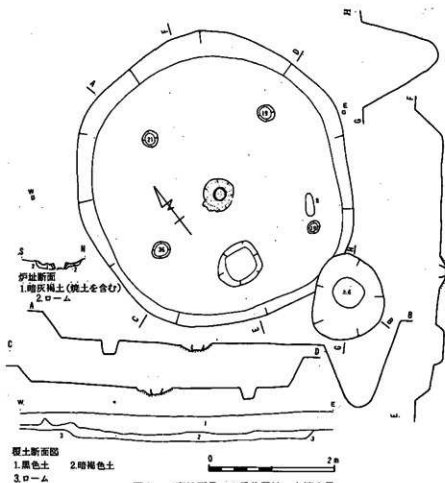
4は平行沈線文の下に斜縄文が施され、踏磯b・cの平行沈線文土器ともみられるが小片で不明。2は覆土出土で、平出Ⅲ類Aとみる。

石器の出土は比較的多く、8・9は石匙、横刃形石器に10～12がある。打石斧13～15は13が完形、他は基部または刃部を欠く。17の磨石斧は基部を欠く。石鏝18・19は比較的大形のものであり、凹石20は1面にのみ大きな凹みをもつものである。

Ⅱ-3号住居址(図7)

Ⅱ-2号住居址の北に隣接し、炉址を検出し、柱穴の発見によって住居址の存在を確かめたものである。西に傾斜する用地中央西端部にあり、ここは表土は浅く耕作の荒れがみられ、壁は削り採られたとみる。径3.5～4.5cm前後の楕円形をなすとみる。床面は堅く主柱穴5個が壁に沿ってあったと思われ、炉はほぼ中央部にあり、径1mの円形をなし、上部は一見集石炉ともみられる跡のり、深さ55cm、袋状の掘りこみをなし、内部は木炭・灰が充満し、上層の石は焼けている。炉址とみるより祭祀的な性格をもつものとも考えられる。

遺物(図24の1～9)は少なく、大半は2号住居址と同一系列のもので、縄文前期末の住居址とみる。



Ⅱ-4号住居址(図8)

F5グリッドに発見され、径4.3~4.6mの円形、南側で25cm、北側で45cmの深さにローム層に掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴4個が比較的整った配置にあり、炉址はほぼ中央部にあり、無文土器の底部を欠く胴下半部を置く埋燗炉である。炉址の南に隅丸方形に近い浅い掘りこみがあり、南東柱の北に石棒状の石1個が置かれている。南東隅の壁を切って土壌6号がある。

遺物(図25) 土器は少なく、1・2は縦の深い切りこみをもつ高い隆帯を貼布し、角押文による方形楕円区画文をもち、4・6・15も同一系の土器で格沢式に比定される。7は埋燗炉の土器で底部を欠く胴下半部であり、3・5・9~14は平出Ⅲ類Aとみる縄文中期中葉初頭の土器である。16・17は本址外の南側に一括出土をみたもので、井戸尻Ⅲ式とみる土器である。

石器(図25の18~27)は比較的多く、打石斧に18~20、横刃形石器に24~27、石錘に21~23がある。

Ⅱ-5号住居址(図9)

4号住居址の北2.6mにあり、径3.1~3.15の円形、15cm前後ローム層に掘りこむ小形竪穴住居址である。床面はあまり堅くなく、主柱穴は4個、炉址は中心より東に片寄っており、焼土は少なく、灰の充満する地床炉でこの東壁に密着して土器底部の出土をみた。炉址の西に2個の炉址ともみる2個の掘りこみが並ぶが焼土はなく、木炭・灰もみられなかった。

遺物(図24の10~13)は少なく、10は炉址東壁に密着して出土した底部で、底に網代痕を残す。11の底ともに桶形をなす浅鉢の底部とみられるが不明である。石器には12の石錘と13の石鏃の出土をみている。

Ⅱ-11号住居址(図10)

9号住居址に南側の一部は切れ、径2.6mの円形、深さ30cmローム層に掘りこむ竪穴をなし、周囲に5個の柱穴をみるが、配置からみて主柱穴は4個とみられる。被災の住居址で竪穴覆土には木炭・灰を多く含み、床面全面に焼土がみられた。炉址は竪穴中心より西にやや片寄っており、浅い掘りこみの地床炉である。

遺物(図26・27)は多く、土器には縄文中期中葉初頭に位置づく格沢式、平出Ⅲ類Aに阿玉台式を伴出している。1の浅鉢は高さ15.6cm、口径20.6cm、器壁は厚く桶形をなす。口縁に4個の突起がつき、その間に1条の角押文がめぐり、突起より下がる隆帯と2段の横位の隆帯に8区画され、その内部は羽状沈線で埋め、胴下半部は無文となる格沢式土器であり、これと同系列とみる土器片に6~9がある。2は平出Ⅲ類Aの深鉢、口縁部は縦の2条1組となる貼布文によって4区画され、その間に斜沈線と2条の波状沈線で飾り、胴部は半截竹管による条

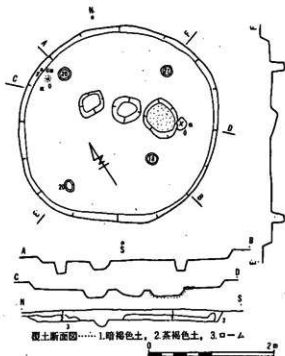


図9 高松原Ⅱ-5号住居址

線を施す。3～5・11は同じ系列土器片である。10はヒダ状の指押し痕をもち、胎土に金雲母の混入がみられ、阿玉台式土器の古いものとみたい。12・13ははっきりしないが同時期のものと思われる。

石器には打石斧に14～18、横刃形石器に23～25があり、20は磨石斧の刃部を欠くものである。20・21は敷打器、26は風化により肌は荒れているが石皿であり、27・28はスクレーパーとみるものである。

(2) 弥生時代後期

II-1号住居址(図11)

用地南西端K7グリッド表土下40cmに発見された。南北4.9×東西4.8mの隅丸方形、ローム層に25～35cm掘りこむ壁穴住居址である。床面は堅く、主柱穴は4個整った配置にある。炉址は北側桁下中央部にあり、石囲炉であったとみられ、石をはずした痕跡をもつ。南壁に付く出入口とみる掘りこみがあり、この掘りこみと炉址を結ぶ線上に間仕切りの柱穴が4個並ぶ。主軸方向N33°Wをさす。

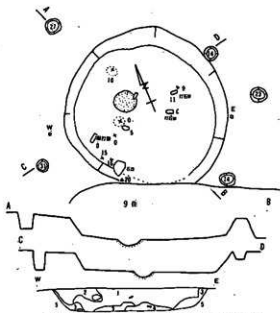
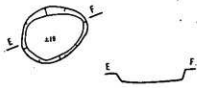
遺物(図31) 土器には壺・甕・台付壺・高杯があり、座光寺原式である。1の台付壺

は口縁部は「く」の字状に緩く外反し、無文。2の甕も口縁部はくの字状に緩く外反し、頸部と胴上半部に波状文をめぐらしている。8は甕の底部、壺には4～7があり小破片である。4の口縁部の上立りは内部に折れ、4分の1同心円文をめぐらし、頸部に大きな波状文を付す。5は立上り口縁部を欠くが、頸部とも無文とみられる。6・7の肩部は6が横走文で終わり、7は波状文の下に4分の1同心円文を施すものである。高杯3は浅い坏部とみられ稜をもって緩いカーブをなして強く外反する。

石器9は磨製石慮丁、2分の1を欠く。10は大形の両側に抉りをもつ横刃形石器とみるもので刃部は鋭い。有肩扇状形石器に11・12があり、いずれも壁に沿って出土をみている。

II-6号住居址(図12)

B5グリッドに発見され、II-7号住居址の北60cmにある。南北3.9×東西3.6mの隅丸方形、ローム層に40cm前後掘りこむ壁穴住居址である。南側は2段となる掘りこみがあり、建替えの住居址ともみられるが不明である。床面は堅く柱穴6個が検出されているが、配置からみて主柱穴は5個とみる。炉址は西側桁下中央部にあり、埋壺炉で東側に枕石1個を置き、主軸方向N56°Wをさす。北東隅壁に付く半円の掘りこみがあるが、出入口の施設としてははずれた位置にある。



11住居土断面図 1.黒色土(炭を含む), 2.暗褐色土, 3.黄褐色土(炭を含む), 4.黒色土(炭多), 5.ローム

図10 高松原II-11号住居址, 土壌19号

遺物(図33)は比較的多く、中島式を主体に欠山式を伴う。壺形の3は厚い器壁をもち口縁先端部は僅かに外反して直に立つ複合口縁をなす。淡黄赤色を呈し、胎土に小石粒を多く含む、欠山式にみる壺である。中島式の壺は小片であり、5・6の口縁部5は器壁の厚く、立上がり口縁帯部に太い縦の沈線をめぐらす類例の少ないものであり、6は口縁帯部の大半を欠くが細い縦の沈線を施し、頸部に波状文を付す一般的なタイプであり、10は底部である。

壺形土器には、1は中島式で頸部がしまつて強く外反する口縁部をも

ち、頸部に4本歯による波状文がめぐり、拓影にみる1回転の初めと終わりを示し、築成は堅くしまっている。炉甕である。4は壺の胴部で赤褐色を呈し、磨きが施されている。11は底部である。

台付壺2は台部を欠く。胴部は大きく張り、極めて薄手の器壁をもち、胎土は白っぽい。欠山式の口辺部がS字状に屈折して立ちあがる壺形土器で口縁部は直に立つ。口辺部は櫛状具の先端による縦の刺突文がめぐり、頸部直下と胴上半部に3条の平行横走文をめぐらし、胴上半部は左に斜行する荒い櫛状具による条線を、胴下半部は右に斜行する深く鋭い条痕様の刷毛目をもつ。

石器には12の有肩扇状形石器、13~16の打製石廬丁4個の出土をみている。

II-7号住居址(図13)

用地内の南東端にあり、南側の一部は用地外となる。南北5.35×東西5.35mの隅丸方形、40~47cmと

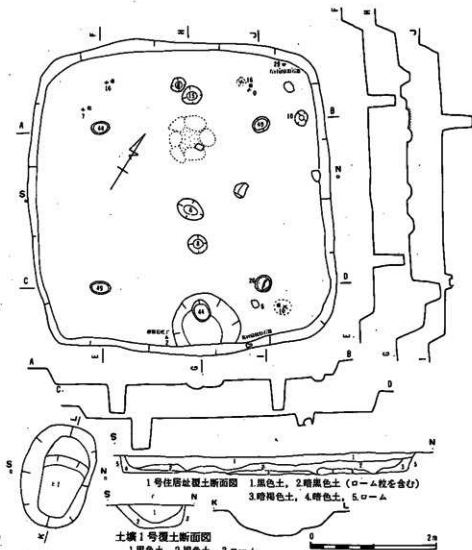


図11 高松原II-1号住居址、土坑1号

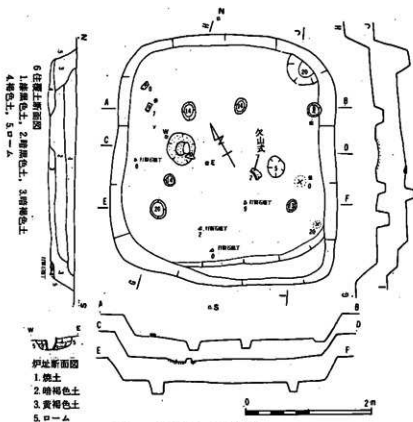


図12 高松原Ⅱ-6号住居址

深くローム層に掘りこむ
 竪穴住居址である。床面
 は堅く主柱穴は4個、東
 側の2個の柱穴には支柱
 穴が付く。炉址は西側桁
 下中央よりやや内側にあり、
 枕石1個を置く地床
 炉である。東壁につく出
 入口の掘りこみがあり、
 それと炉址を結ぶ線上と
 その北側に2列に間仕
 切の柱穴が並ぶ。間仕切
 南東端の柱穴の周囲に焼
 土がみられ、主軸方向N
 48°Wをさす。

遺物(図33・34の21~
 26) 土器には壺・甕・
 台付甕・高杯があるが、
 大半は小破片であり、座
 光寺原式である。壺3~
 5は口縁部片で、短く内
 傾する口縁部帯をもち、
 3は波状文、4は縦の沈

線をめぐるし、5は口縁端を欠くが口縁部帯を荒い刷毛目を施しこれを縦の沈線で切る類例の少ない施文
 である。甕は座光寺原式にみる口縁部は緩く「く」の字状に外反を示すものである。1は口縁部に刷毛目整形
 が施され、頸部直下に波状文をめぐる。2は球状となる胴部をなし、底部はしまって立上がりをもせ、
 頸部直下に波状文をめぐる。6・7は無文、8は斜行短線文が2段に付くとみられ、9は波状文が2段
 に付く。11~13は波状文・斜行短線文をもつ破片であり、12・13は壺のものとも思われる。甕の底部に14、
 16があり、14は随磨きがなされ、底部に蓄とみる圧痕がつく。15は台付甕の台部、17は高杯の浅い杯部で
 器壁が厚い。

石器1は、磨製石庖丁、2分の1を欠く。19は有肩扇状形石器のミニチュアとみる。有肩扇状形石器に、
 21・22があり、石庖丁とみる23・24の横刃形石器がある。26の砥石は2面が使用されている。

Ⅱ-8号住居址(図14)

D14グリッドに南東端の一部がわずかにかかり発見され、北4.2mに9号住居址がある。南北4.75×東西
 4.65mの隅丸方形をなすが、南東コーナーは斜めに切りこみ、南西コーナーは鈍角をなし、ローム層に
 20cm前後掘りこむ竪穴住居址である。床面は堅く、主柱穴4個はいずれも深く、周りをロームで囲めてい
 る。炉址は西側桁下中央より東によってあり、長軸67cmの楕円形の掘りこみの中央部に枕石2個を置き、
 その東側のみに焼土をもつ地床炉である。東壁中央部に付く出入口の掘りこみがあり、これと炉址を結ぶ
 線上とやや北に寄って間仕切の柱穴が2列に並び、主軸方向N55°Wをさす。中心よりやや東に寄る浅い掘

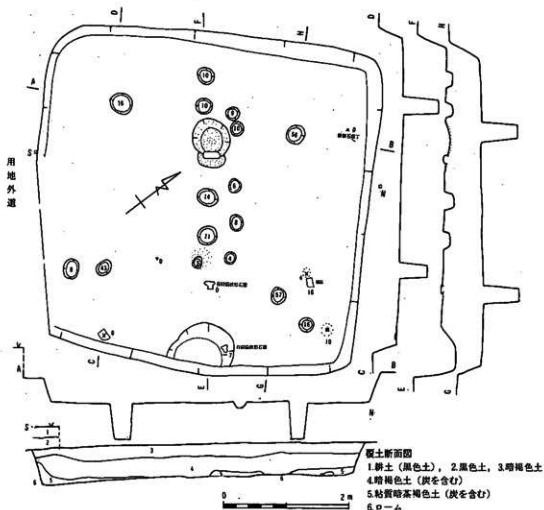


図13 高松原Ⅱ-7号住居址

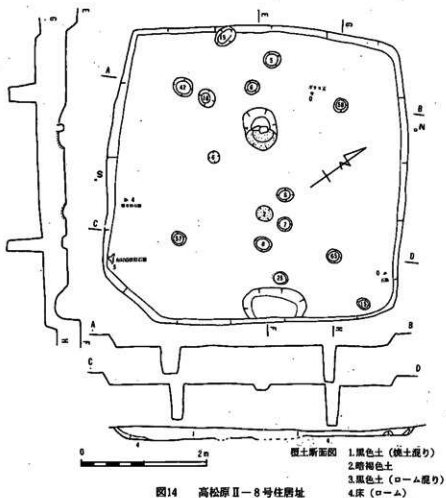
りこみに焼土がみられる。図14に図示していないが、北壁東側には土塊13号があり、これを切っている。

遺物(図34の1~11)は少なく、注目されるのは炉址北70cmの床面に出土した11のガラス小玉であり、青緑色を呈している。土器は小片のみで壺には3~7があり、壺の1・2の口縁部は無文であり、その口縁の開きからみて座光寺原式である。石器に8の有肩扇状形石器と横刃形石器があり、10の石鏃は縄文時代のものであり、本址が切っている土塊13号のものである。

Ⅱ-9号住居址(図15)

Ⅱ-8号住居址の北4.2mにあり、Ⅱ-11号住居址の南端を切っている。南北4.65×東西5.75mの隅丸方形20~30cmローム層に掘りこむ壑穴住居址である。床面は堅く、支柱穴4個が整った配置にある。炉址は西桁下中央部よりやや内側に入っており、枕石1個をおく地床炉である。東壁中央より東に寄って出入口の掘りこみが2段になって付き、主軸方向N58°Wをさす。

遺物(図35・36) 土器(図36)は少なく、壺と甕の破片である。壺には1~6・14があり、立上がり口縁部には縦の沈線をめぐらし、1の頸部には浅い波状文がみられ、2・3の頸部は無文である。4に

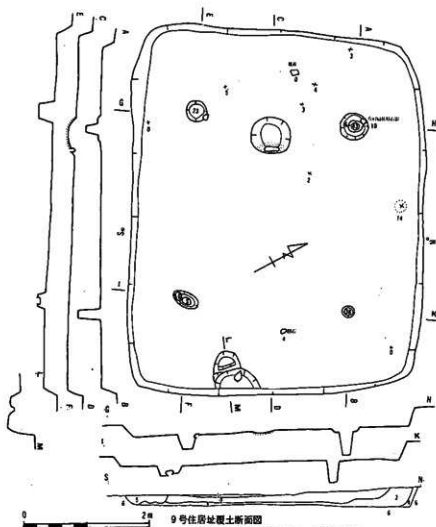


は4分の1同心円文、6は2段に斜行短線文がつく。底部には14がある。壁には7・13・15・16があり、口縁部は座光寺原式にみる緩く「く」の字状に外反し、文様は7・9は波状文に斜行短線文の組合わせ、10・12は波状文のみとみられ、8・11は無文であるが、8の口縁端には浅い刻みがめぐる。底部に13・15・16がある。

石器(図35) 1の砥石は砂岩製、側面に細い砥ぎ溝をもつ。2は凹石、3は横刃形石器で長方形をなす。有肩盾状形石器に4がある。

Ⅱ-10号住居址(図16)

用地のほぼ中央東端にあり、2分の1近くは排水溝と運動場のネットのため調査不能。南北4.55mの隅丸方形をなし、ローム層に30~40cm掘りこむ壑穴住居址である。床面は堅く、主柱穴3個が検出されているが、配置からみて4個とみられ、深く掘りこまれている。炉址は西桁下中央よりやや内側に入っており、東側に枕石1個を置き、その両端に小石が1個ずつつく地床炉である。炉址の西と東に間仕切とみる浅い柱穴がつき、主軸方向はN38°Wをさす。



9号住居址覆土断面図

- 1.黒色土, 2.暗黒色土(ローム粒を含む)
 3.暗褐色土(ローム粒を含む), 4.黄褐色土
 5.褐色土(ローム層), 6.ローム

図15 高松原Ⅱ-9号住居址

遺物(図37・38) 土器には1・9の完形の壺があり、壺は10以外は小破片であり、座光寺原式である。壺1は高さ31cm、口径12.8cm、最大径は胴中央部をやや下がってあり、径24.9cmソロバン球状に張り出し、口縁帯の立上りは内部にくの字状に折れ、4本歯による細かい櫛描き波状文を2段に、頸部にも同様な波状文がめぐり、頸部直下に4分の1は大きく、他は小さな波状文を、肩部には大きな波状文をめぐらす類例の少ない文様構成をなす。9は高さ32cm、口径14.2cm、胴最大径は中央部をやや下になり、径23.6cmの楕円球状をなす。口縁帯の立上りはやや内部に折れ、縦の沈線がめぐり、頸部と肩部に波状文をめぐらす。5・6は壺頸部片で波状文がみられる。

壺10は口縁端を欠く。口縁部と胴上部に大きな波状文をめぐらしている。4は2段の波状文を、2・3・11は無文、7・8に斜行短線文がみられ、底部に12・13がある。

石器には14の磨石斧があり、長さ7.4cmと短かく、刃部幅5.5cmのずんぐりした形状をなし、頭部は殿

打痕が著しく、刃部は鋭く給刃をなし、特異な石器である。

Ⅱ-12号住居址(図17)

B29グリッドに発見され、東側の一部は排水溝にかかり調査不能。南北5.4×東西推定5.25mの隅丸方形をなし、ローム層に25~30cm掘りこむ壁穴住居址である。床面は堅く、主柱穴4個が整った配置にあり、炉址は西側桁下中央部にあり、75×60cmの楕円形の掘り込みの地床炉であるが、その東側は炉壘をはずしたとみる深い掘りこみがあり、東に枕石2個を並べている。炉址を中心にした東西線上に間仕切りとみる浅いピットが2列に並び、主軸はN58°Wをさす。

遺物(図39・40) 土器

壺光寺原式である。壺、1は口径13.7m、胴最大径は中央部にあり径24.3cm、球状をなす。立上がり口縁部は強く内傾し、縦の沈線を施し、頸部に横走文、それをはさんで口縁部と肩部に波状文がめぐり胴上半分には刷毛目の擦痕がみられる。立上がり口縁部を残すのに2~4があり、2は無文・3は波状文・4は縦の沈線が施され、破片にみる文様には大きな波状文、斜行短線文に4分の1同心円文をもつ5、2段の斜行短線文の8、横走文に細かな波状文のつく9、大きな4分の1同心円文の7がみられ、15~17は壺底部である。

壺、11は口縁端部に刻目をもつ以外は無文であり、台付壺ともみられる。8は2段に斜行短線文がみられ、底部に14がある。

10は高杯の坏部、口径27.6cmの大形であり、稜をもって立上がり、口縁部はくの字状に大きく外反し、浅い描き波状文が2段にめぐり。

石器には19~21の有肩扇状形石器があり、21は長さ16.5cm、刃部幅14cmと大形のものである。18の横刃形石器は両側に抉りをもたないが石彫りとみられ、刃ずれ痕を残す。

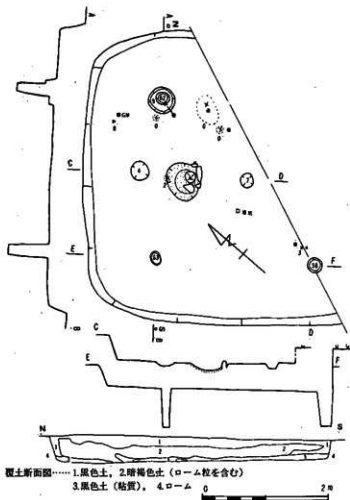


図16 高松原Ⅱ-10号住居址

II-13号住居址 (図18)

用地内の北端に近いJ33グリッドに発見され、1辺が5.4mの隅丸方形をなし、ローム層に30~40cm掘りこむ壁穴住居址である。被災後の住居址で床面には炭化木が火災により倒れた状態を示し、木炭・灰が全面にみられた。主柱穴は4個、楕円形の深い掘りこみをなし、割り木を柱に用いたことを示している。

炉址は西側桁下中央部にあり、円形の地床炉で東側に枕石のかわりに土器片2個を立てている類例の稀なものであり注目された。東壁中央部近くに入出口に使用されたともみる長方形の平石を置いている。主軸方向N108°Wをさす。南東隅の壁を僅かに切って土壌20号が掘りこまれている。

遺物 (図41・42) 土器は壺が大半を占め、壺は僅か小片がみられたにすぎない。壺、1は頸部から肩部、胴下半部下を欠くが、口径20.6cm、残存胴最大径40.5cmと大形壺であり、口縁帯の立上がりはやや内側に向き、縦の沈線を、口縁帯から頸部にかけて大きな波状文、肩部の波状文下に2段の斜行短線文で飾っている。2は完形、高さ26cm、口径12.2

cm、胴最大径は中央部にあり、21.6cmの球状をなし、立上がり口縁帯はやや内傾する。文様は口縁帯部は縦の沈線、頸部に3本歯の櫛描きによる12条の横走文、肩部は3条2組の波状文をめぐらし、その下に3条よりなる浅い櫛描の斜条線が施されている。胎土には雲母を含む砂質粘土が用いられている。3は口径11cm、胴最大径は中央部にあって19.9cm、球状をなし、底部を欠く。口縁帯の立上がりは内側に折れ、縦の沈線をめぐらし、頸部から肩部にかけて4本歯の櫛描2組を1単位とする横走文を3段にめぐらすみの文様構成であり、

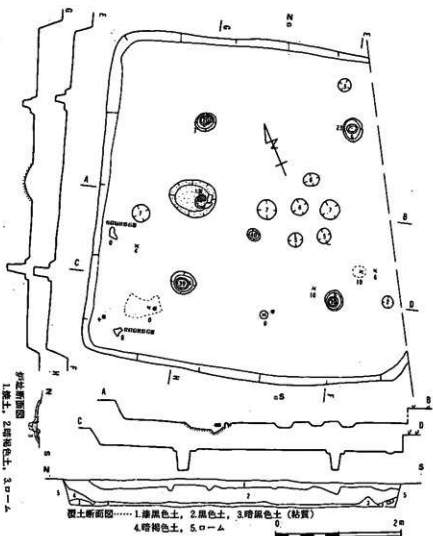


図17 高松原II-12号住居址

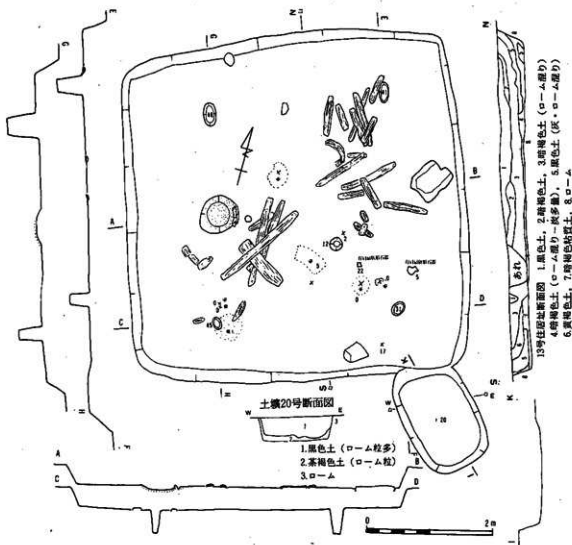


図18 高松原II-13号住居址、土壙20号

1回転を示す櫛歯のハネがみられる。4は炉址の枕石のかわりに立てられた土器片の一つで、2段の櫛歯短線文と2段に4分の1同心円文を連続してめぐらす類例の少ない文様構成をなす。5の大きな波状文と4分の1同心円文の組合わせ、6は横走文に波状文を残す。

壘、8は口縁部がくの字状に緩く大きく外反し、刷毛目整形の上に波状文と斜行短線文をもち、7は2段に波状文を、9も同じ施文とみられ、座光寺原式である。

石器には、10・11の有肩扇状形石器の出土をみている。

II 次調査弥生時代後期住居址一覧表(表2)

(注 土器は口縁部をもつを1とした)

住居調査番号	時期	規模・形状			柱	注	穴	炉	入口施設	土器			石器			その他遺物	備考	
		長軸×短軸	壁文	形状						壺	台付壺	高林	その他	石	磨石			磨石
II-1	盛光寺原	4.9×4.8	25 ^{cm} ×35	方形	4	1	3	石圍炉(石はずされる) 西折下中央	有(中央)	N35°W	2	1	1	大形1				
II-6	中島	3.9×3.6	40~	-	5	1		埋炉・炉壁石 西折下中央	有(北東隅)	N56°W	3	3	1	4			欠山灰台付壺 1個	
II-7	盛光寺原	5.35×5.35	40~	-	4	2	9	埋炉・炉壁石 西折下より内に入る	有(中央)	N48°W	3	5	1	大形1 2				
II-8	"	4.75×4.65	20	-	4	1	7	"	有(中央)	N55°W	1	2		1	石	ガラス 土器少なし 石圍は埋入		
II-9	"	5.75×4.65	20~ 30	長方形	4		なし	"	有 (中・南による)	N58°W	3	5		1	1			
II-10	"	4.55×7	30~ 40	方形	3	2		"	?	N38°W	2	4						
II-12	"	5.4×5.25	25~ (測定)	30	4	6	3	埋炉(壁をぬく形跡) 西折下中央・炉壁石	?	N58°W	4	2	1	3	1			東2分の1は 調査不能 埋炉一部 調査不能
II-13	"	5.4×5.4	30~ 40	-	4	1	1	埋炉(炉壁石のみわり に土器片をおく) 西折下中央	埋炉をもうて 半石を置く	N108°W	1	5						火灰

2. 独立柱建物址

独立柱建物址Ⅱ-Ⅰ (図21)

Ⅱ-9号住居址の調査を先行したため北西端の柱穴は不明となったが、1間×2間の独立柱の建物址とみる。柱穴内の覆土は黒色土である。遺物はなく、Ⅱ-9号住居址は座光寺原式であり、弥生時代の遺構では座光寺原式より古いものではなく、そのため9号址より後の中島式の建物址とみるが、その決め手は得られなかった。

3. 柱穴群

Ⅱ-柱穴群Ⅰ (図19)

B9・B11グリッドに発見され、7m×6mの範囲に50個の柱穴が不規則に散在する柱穴群である。この一帯は桑の改植による深耕の荒れがめだち、桑株の根が深くはいり込み、柱穴との区別のつけ難いものも多くみられた。柱穴内には黒色土で埋まる弥生後期とみるもの、暗褐色土に埋まる縄文時代とみるものがある。弥生後期の建物址とみる柱穴の配列も不明部分があつて確めがたく、縄文時代の壁を削られた住居址の存在ともみられるものも炉址とみる焼土はみられず、それらの性格は把握できぬまま柱穴群としたものである。

これから出土した遺物(図28の1~8)には1~4の土器片は縄文中期中葉初頭に位置するもの

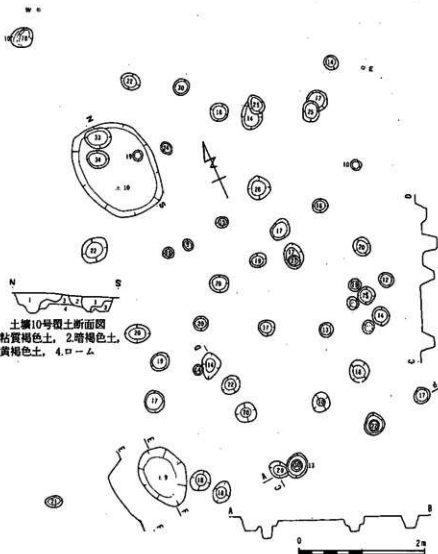


図19 高松原Ⅱ-柱穴群Ⅰ, 土壌9号・10号

であり、石器には5の横刃形石器、6の磨製石斧、7・8の石鏟がある。

Ⅱ一柱穴群Ⅱ(図20)

柱穴群Ⅰの北に接し、径4～4.5mの楕円形に6個の柱穴が配せられており、柱穴内は暗褐色土で埋まる。一見、壁は削りとられているが縄文時代の住居址の柱穴の配置とみられたが、炉址は発見できず、柱穴群としたものである。

遺物(図28の9～14) 土器は9～11の3片があり、10は縄文中期の猪沢式とみられ、9・11は縄文後期である。石器には12の横刃形石器、13・14の小形の石鏟がある。

4. 土 墳

土墳20基が調査され、Ⅱ-8号住居址東周辺には9基があり、土墳群をなしており、Ⅱ-2号住居址北東に3基がかたまっている以外は点在している。住居址内に掘りこまれる5号は住居址に付属する施設とみるものであり、住居址に接する6号・20号があり、住居址によって切られる4号・12号等がある。

次の表にまとめ、特殊なもの、遺物については後に記することにした。

発掘調査した土墳20基の中、弥生後期とみるはその覆土の黒色土、住居址との切合いからみてⅡ-20号のみで、他は暗褐色で埋まり、縄文時代である。

縄文時代の土墳ではⅡ-14号出土の図30の16～20の土器片は猪沢式であり、Ⅱ-1・11・18号出土土器片(図29の1・2 図30の10・11、図30の25 26)は平出Ⅲ類Aの古い時期であり、Ⅱ-11号の無文の胴下部(図30の12)もⅡ-4号住居址の炉壺と同系とみられ、いずれ

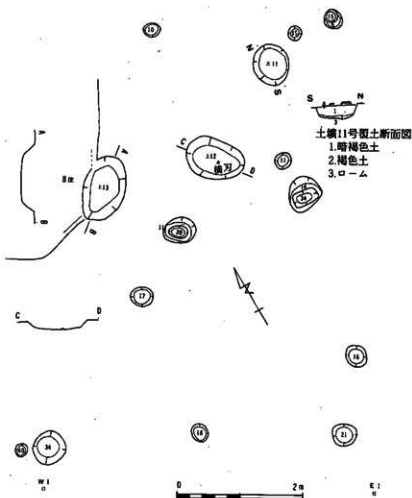


図20 高松原Ⅱ一柱穴群Ⅱ、土墳11号・12号・13号

も縄文中期中葉初頭に位置づくものである。石器のみ出土土壌も同時期のものと思われる。

Ⅱ-4・5号はⅡ-2号住居址に付属するものとみられ、土壌5号出土の縄文前期末諸磯C式土器が2号住居址出土と付き底部を欠くのみ図22の1になっている。Ⅱ-4号は遺物の出土はないが、その形態からみて住居址に付くものと考えたい。

Ⅱ-6号は特殊な例とみられ、径110~135cmの円形、深さ136cm掘りこむ土壌であり、出土した土器片(図29の6~13)は6~8の口縁部は肥厚し、この部分に太い沈線をめぐらすものと、9・10・13の縦または横位の太い沈線文をもつ土器、12の把手等、縄文後期前半に位置づくものとみられる。

Ⅱ-20号土壌は座光寺原式のⅡ-13号住居址の南東隅を切るもので、覆土は黒色土にローム粒を多く含むものが主となり、弥生後期住居址の覆土に似る。遺物はなく、その時期ははっきりしないが、弥生後期後半とみたい。

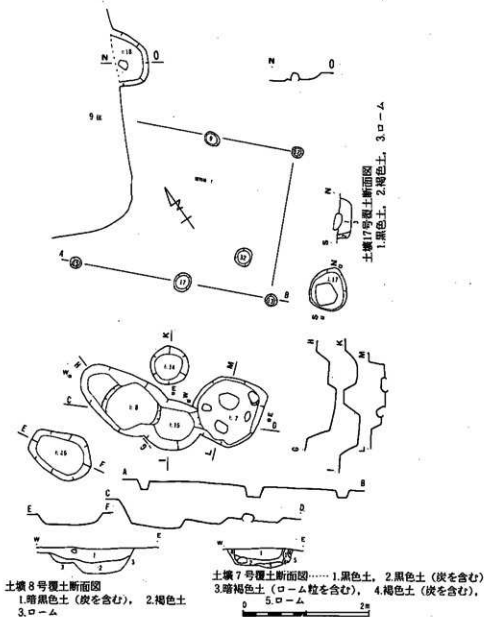


図21 高松原Ⅱ一掘立柱建物址Ⅰ、土壌7号・8号・14号・15号・16号・17号・18号

高松原Ⅱ—土壌—一覧表(表3)

土壌 番号	図 番号	大きさ (cm)	深 さ (cm)	形 状	主 軸 方 向	遺 物	遺物図 番 号	備 考	時 期
Ⅱ-1	11	163×110	40	楕円形	N14°W	平出3 A土器片2	29の 1+2	2段に落ちこむ	縄文 中期中
Ⅱ-2	7	100×95	60	"	N19°E	なし			
Ⅱ-3	"	110×103	20	"	N68°E	縄文中期中葉土器片3	29の 3-5		縄文 中期中
Ⅱ-4	"	105×65?	15	"	N22°W	なし		Ⅱ-2住の施設か 土Ⅱ-5に西は切られる	
Ⅱ-5	"	105×100	95	"	N65°E	諸磯C式土器3分の1個体 中間壁につき出土	22の1	Ⅱ-2住の土器につき、2 住の施設?	縄文 前期末
Ⅱ-6	8	135×110	136	"	N46°E	縄文後期前半土器片 横刃形石器1、石鏃1	29の 6-15	Ⅱ-4住の東南壁を切って 掘りこむ	縄文 後期前半
Ⅱ-7	21	110×105	25	隅丸 方形	N50°E	縄文中期中葉土器片1 耳栓1、打石斧2、磨石斧 1、横刃形石器2	30の 1-7	Ⅱ-15土に西を切られる。 内部に石7個を置く	縄文 中期中
Ⅱ-8	"	90×140	25 40	長楕 円形	N18°W	打石斧1、横刃形石器1	30の 8-9	2段に掘りこみ、東側は Ⅱ-15土を切る	" ?
Ⅱ-9	19	100×71	32	楕円形	N4°W	なし			不明
Ⅱ-10	"	155×123	25	"	N4°W	なし		3個の柱穴が掘りこまれる	"
Ⅱ-11	20	68×57	21	"	N4°W	縄文中期中葉前半土器片・ 底部	30の 10-12		縄文 中期中
Ⅱ-12	"	94×68	15	"	N40°W	横刃形石器1	30の13		"
Ⅱ-13	"	105×67	23	"	N55°E	縄文中期中葉前半土器片2	30の 14-15	西側Ⅱ-8住にかかる	"
Ⅱ-14	21	62×60	23	円形	N38°E	縄文中期中葉終末式土器片	30の 16-20		"
Ⅱ-15	"	78×?	33	" ?	N34°W	縄文中期中葉初頭土器片 石鏃2、打石斧1	30の 21-24	Ⅱ-17土を切り、Ⅱ-18 に切られる	"
Ⅱ-16	"	105×75	19	楕円形	N30°W	なし			" ?
Ⅱ-17	"	67×58	22	"	N38°E	なし		上部に大石1個を置く	" ?
Ⅱ-18	"	90×?	13	"	N25°E	平出ⅢA土器片2 凹石1	30の 25-27	西側はⅡ-9住に切られる 底部に石1個を置く	"
Ⅱ-19	10	84×110	19	"	N0°E	なし			不明
Ⅱ-20	18	180×118	37	隅丸 長方形	N44°W	なし		Ⅱ-13住の南東隅を切る 覆土は黒色土にローム粒多 く含む	弥生 後期

高松原遺跡Ⅱ次調査出土石器一覧表(表4)

(1) 縄文時代

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考	遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考				
Ⅱ-2住		22	8	石 匙	黒	2.2	2.4		基部欠け	Ⅱ-11住		27	20	打	凝	10.2	?	270	刃部欠け		
		"	9	"	玄武岩	4.5	5.9	28				"	21	21	敲	硬	6.5	3.9	126		
		"	10	横	凝	5.5	7.8	93				"	22	22	横	"	4.9	5.6	42		
		"	11	"	硬	5.5	6.5	65				"	23	23	"	"	5.0	6.9	42		
		"	12	"	"	5.8	8.5	40				"	24	24	"	"	8.6	9.4	255		
		"	23	13	打	凝	10.5	4.0	70				"	25	25	"	"	3.3	6.3	24	
		"	14	"	硬	7.0	4.0	73	基部欠け			"	26	26	石 皿	花崗岩	17.5	17.0		風化	
		"	15	"	"	8.4	3.4	48	刃部欠け			"	27	27	スクレーパー	黒 玻璃質 安山岩	2.4	4.0	2		
		"	16	"	"	6.2	4.1	20	基部欠け			"	28	28	"	"	1.5	2.0			
		"	17	18	磨石弁	凝	10.3	5.0	240				Ⅱ-1住 穴群Ⅰ		28	5	横	凝	5.5	11.0	82
"	18	石 錘	硬	7.5	6.5	130		6	6	磨石弁	"	10.4			4.1	200					
"	19	"	砂 岩	8.4	5.8	143		7	7	石 錘	硬	3.6			5.4	100					
"	20	凹 石	花崗岩	8.2	9.3	425		8	8	"	"	4.6			3.5	36					
Ⅱ-5住		24	12	石 錘	凝	6.1	4.4	65		Ⅱ-2住 穴群Ⅱ		28	12	横	硬	4.0	6.0	16			
		13	石 錘	チャート	2.8	1.4		翼部欠く	13			13	石 錘	凝	4.1	2.3	15				
Ⅱ-4住		25	18	打	凝	14.6	5.0	245		Ⅱ-1土 6		28	14	"	硬	4.4	3.6	30			
		"	19	"	"	13.5	4.1	123				29	14	横	"	5.0	10.0	88			
		"	20	"	"	10.3	4.5	140				15	15	石 錘	"	9.0	5.3	125			
		"	21	石 錘	"	8.0	5.3	125	一部欠け			Ⅱ-1土 7		30	3	打	凝	11.9	5.0	206	
		"	22	"	硬	5.8	4.7	68						4	4	磨石弁	変輝緑石	9.2	5.0	300	基部欠け
		"	23	"	"	6.0	5.4	78						5	5	横	凝	5.3	9.2	83	
		"	24	横	"	11.3	11.5	335						6	6	打	硬	6.3	5.0	45	
		"	25	"	"	4.7	7.2	32						7	7	横	"	4.0	5.5	25	
		"	26	"	"	7.0	7.9	82				Ⅱ-1土 8		8	8	打	凝	12.3	3.9	145	刃部欠け
		"	27	"	"	5.5	9.0	66						9	9	横	硬	5.9	11.2	126	
Ⅱ-11住		26	14	打	凝	13.0	4.3	176		Ⅱ-1土 12		"	13	"	"	3.8	7.0	26			
		"	15	"	"	7.5	5.4	74				Ⅱ-1土 15		22	22	石 錘	"	5.8	5.1	78	
		"	16	"	硬	11.0	3.5	115						23	23	"	"	7.5	4.0	71	
		"	17	"	"	10.5	4.2	108						24	24	打	"	8.9	4.1	89	
		"	18	"	凝	11.7	3.9	121	刃部欠け					Ⅱ-1土 18		27	27	凹 石	花崗岩	7.6	10.5
"	27	19	敲	硬	20.3	7.0	1340														

(2) 弥生時代後期

遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考	遺構	図番号	No.	器種	材質	長さ cm	幅 cm	重量 g	備考		
II-1住		31	磨石磨丁	硬質頁岩	3.8	残存 4.8	12	2分の1欠け	II-8住		34	有 磨	硬	8.1	7.5	180	縄文土壌よりの混入		
		10	有抉石器	硬	13.2	14.2	675	9			機	黒	6.3	9.4	69				
		11	有 磨	硬	9.5	10.6	145	10			石 鏝	黒	2.3	1.0					
		12	"	"	8.7	11.6	140												
II-6住		32	打石磨丁	"	4.0	7.7	26	刃部一部欠け	II-9住		35	1	砥 石	砂 岩	9.1	9.3	485	側面に砥石溝	
		13	"	"	5.2	8.5	61	2			凹 石	"	9.8	8.1	528				
		14	"	"	4.2	6.8	49	3			機	黒燧母 片岩	3.5	6.1	24				
		15	"	"	5.0	8.3	50	4			有 磨	硬	11.5	9.5	245				
II-7住		33	磨石磨丁	黒燧母 片岩	3.5	4.3	7	2分の1欠く	II-10住		38	14	給刃磨 石 斧	角 閃 石 岩	7.4	5.6	240		
		19	ミニ有磨	硬	5.7	3.7	13	II-12住				40	18	機	凝	4.3	6.3	25	刃部を磨く
		20	機	"	9.6	6.5	390					19	有 磨	硬	10.6	9.0	165		
		34	21	有 磨	"	11.0	11.3		385	20		"	"	7.6	残存 5.9	76	3分の1を欠く		
		22	"	"	8.7	9.0	120		21	"		"	16.0	13.8	516				
		23	機	"	3.8	7.6	28	II-13住		42	10	"	"	14.2	11.0	350			
		24	"	"	4.0	8.1	23			11	"	"	9.2	11.1	256				
25	砥 石	砂 岩	13.7	5.4	227														

打…打石斧、機…機刃形石器、砥…砥打器、有磨…有磨屑状形石器
硬…硬砂岩、凝…凝灰岩、黒…黒曜石

IV 集落と遺物の様相

高松原遺跡は飯田市と上郷町の境界をなしている野底川によって形成された段丘上の扇状地の先端部にある。南は比高差20mの段丘崖となって野底川の氾濫堆積面に、東は50m余の比高差をもつ段丘崖となって天竜川による沖積段丘面となる。南側の段丘崖を切りこむ野底川の支流による谷頭浸蝕が、遺跡の西と東に入りこんでいる。この西の谷頭浸蝕を中心にした南北500m、東西250mの範囲に遺跡は立地している。

昭和50、51年度調査-I次と本次調査-II次は地続きの面であり、遺跡の中央部とみる範囲である。I次調査では弥生後期の住居址35軒（座光寺原式31、中島式4）・土壇2基・掘立柱建物址8軒・円溝址2基があり、縄文時代の土壇85基（注1）が検出され、多くの資料の出土をみている。

本次調査は、I次調査結果を引継ぐもので、縄文時代では早期末2軒、中期中葉3軒の住居址が検出さ

れ、土壌19基の大半は住居址と時期を同じにするが、後期の土壌も検出され、柱穴群の一つにも後期とみるものがある。弥生後期では前半の座光寺原式7軒、後半の中島式1軒の住居址等が調査されている。ⅠⅡ次調査とも遺跡のほぼ中央部とみる範囲であり、ここに座光寺原期を中心にした集落の展開がみられる。

縄文早期末の住居址は用地南西端部にあり、Ⅱ-2号住居址は楕円形の被火災の竪穴式住居址であり、炉は石囲炉とみられ、石をはずされた痕跡を残し、その東側に土壌5号とした径105cm、深さ95cmの円形の掘りこみの中間部壁出土土器3分の1個体と床面出土とが付き胴下半部を欠く1個体(図22の1)をなし、住居址内の施設とみられたものがある。Ⅱ-3号住居址は壁は削られ、集石炉ともみる大きな深い掘りこみの炉址をもち、周囲に柱穴の検出によって住居址と認めたものである。飯田地方でのこの期の発掘例は稀で、住居址の形態についての問題をもつものである。土器は口縁部は竹管文を地文に結節状厚線文、胴部には羽状竹管文を施す。諸磯C式である。

検出された住居址の位置からみて水路の西側の未調査で造成された飯田女子高校テニスコートと、その南側に集落が存在したものと思われる。

縄文中期住居址3軒と土壌の大半はこの期のものであり、Ⅰ次調査の土壌83基は中期初頭とあるが同時期とみられる。Ⅱ-4号住居址は埋燬炉をもち、Ⅱ-5号住居址ははっきりしないが炉壁に底部を置いている。Ⅱ-11号は小竪穴内に地床炉をもち、竪穴外周に柱穴をもつ特異な形態をなしている。

土器は角押文による方形・楕円形区画文をもつ落沢式と、半截竹管文を主体とする平出Ⅲ類Aに阿玉台式土器を伴い、中期中葉初頭に位置づくものであり、落沢式には浅鉢の桶形土器もみられる。

この期の検出された土壌は約100基を数えるに對し住居址3軒であり、その数は少なすぎる。調査した住居址は調査区域の西側に偏在しており、水路を隔てた西側の飯田女子高校テニスコートに集落の中心があったものと推測される。

縄文後期の遺構に土壌1基(Ⅱ-6号)と柱穴群Ⅱがあり、用地南側に発見されている。土器は小片のみであるが、肥厚する口縁部をもち、文様は太い沈線によるもので後期前半とみる。飯田地方における後期集落は小規模であり、遺構が点在する程度のものが今までの発掘調査例である。おそらく用地外の南側に遺構の存在が予想される。

弥生時代後期住居址はⅠ次・Ⅱ次を合わせて43軒が検出されている。前半座光寺原式が38軒、後半中島式が5軒であり、掘立柱建物址9軒等がある。

住居址の形状は隅丸長方形5軒で他は隅丸方形をなし、規模はⅠ次調査結果では最大の30住の53㎡余があり、これに次ぐ3住居址があるが30㎡以下であると報告されている。今次調査でも20~30㎡であり、Ⅱ-6住の中島式のみ14㎡と小さい。座光寺原式に比し、中島式住居址の規模は小さくなる傾向をもつ。主軸方向は大半は北西を示すが、北東が3軒、南西の2軒がある。主柱穴は最大の30住の6個以外は4個の一般的なこの時期のものである。間仕切りとみる浅い柱穴が炉址と出入口部を結ぶ線上に並ぶのが、発掘した住居址の半数にみられ、出入口とみる施設の壁につき斜めに掘りこまれた穴が2時期を通じてみられ例外としてⅡ-13住には長方形の平石を壁に沿って置くものがある。

炉址は奥壁に近い桁下の中央部または内側に寄っており、奥壁よりはみられない。形態には座光寺原式では地床炉に枕石一炉縁石を置くが一般的であり、石囲炉の石をはずされたⅡ-1住、炬燵をはずされたⅡ-12住例があり、Ⅰ次調査では埋燬炉をもつが3例である。中島式ではすべて埋燬炉である。

掘建建物址はⅠ次に8棟、Ⅱ次に1棟が検出されている。Ⅰ次では1間×2間と1間×3～4間の大小があり、2棟単位に住居址と共存していると報告され、Ⅱ次では1間×2間の1棟であるが建物址ともみるを2・3みられたが桑の栽植による荒れが多く、桑株の深い入りこみ等により十分な把握にいたらなかった。建物址のあり方からみれば高床式の構造をなすものとみたい。

座光寺原式土器 Ⅱ次調査検出の座光寺原式住居址出土には壺・甕・台付甕・高杯があり、住居址によって出土量の差があり、台付甕・高杯出土住居址は2・3軒にすぎない。また壺のみに完形があり、甕には器形を知ることのできるのはいくつかである。

壺形土器は当地方後期の特徴である「く」の字状に折立する口縁部をもち、大形と中形の出土をみている。大形壺(図41の1)は口径20.7cm、胴残存部径40cm、推定最大径46cmとみる。中形壺は一般的なもので口径12～15cm、胴残存部径20～25cm、高さ30cm前後である。器形を完形品でみると、①頸部が短く胴部が球状(図42の2)、②頸部がしまって口縁部は大きく外反し折立する口縁部は強く内傾し、胴部は大きく張り、ソロバン球状をなす(図37の1)、③胴部は頸部から緩く開き胴下半部に最大径をもち卵形をなす(図38の2)がみられる。座光寺原式後半に位置づき、①は次期中島式への移行を示すものとみる。文様は口縁部から肩部に集中し、櫛状具・篋状具による。立上がり口縁部にはこの期の一般的な縦の沈線文を主体に、波状文が次ぎ、稀に4分の1同心円文・無文がある。後期後半に一般的にみる頸部の横走文をはさんで上下に波状文をめぐらす例は少なく、頸部のくびれ部から肩部への施文が多く、波状文・横走文が主となり、斜行短線文・4分の1同心円文がある。特異な施文に図31の1は頸部に二段1組となる細かな波状文を、その直下に4分の1は大きな波状文を他は小さな波状文に施文具を変えている例がある。全体的に櫛描による波状文が極めて浅い施文具によることに注意される。

甕形土器は座光寺原式の特徴である口縁部は「く」の字状に緩く外反し、胴部の大きく張るものと、口径が胴部より大きく広がりをもつものがある。文様は櫛状具による波状文を二段・一段にめぐらす。波状文に短線文の組み合わせ、無文、無文で口唇に刻目を施すものがあり後の二者には台付甕のものが含まれるとみられる。口縁部に刷毛目、胴部に磨き整形を施す例が僅かにみられ、これらは中島式への移行を示すものと受けとめられる。

台付甕で器形を知るものに図31の1があり、脚台のみに図33の15がある。これらの他に無文で口唇に刻みをもつ甕片は台付甕ともみられる。図31の1は無文で胴部は大きく張り、底部はちぢまって台部となる。

高杯 出土をみたら3住居址の3点であり、浅い杯部のみである。図40の10は口径27.5cmと大形であり口縁部と下底部は緩をもってつらなり、さらに口縁部は大きく外反しながら張出し、二段の波状文をめぐらしている。

中島式土器 Ⅱ次調査において中島式住居址はⅡ-6号住のみであるが、土器には中島式に伴って欠山式の出土をみている。中島式の壺は口縁片と底部の出土をみたのみであり、座光寺原式と口縁部では大差はみられない。

甕形土器図32の1は炉甕で底部を欠く、頸部がしまって強く外反する口縁部と洗練された波状文に、同図4・11の胴部から底部への磨きにも中島式の特徴をみるものである。

欠山式土器(図32の2・3)3の広口壺は口縁部が強く外へ折れまがり、さらに先端部が屈曲して垂直に立上がる、いわゆる複合口縁の形態に近いものである。2は複合口縁台付甕で、器壁が非常に薄く、口縁部をS字状に屈曲させた複合口縁をなし、口縁部がたちあがっている形態に属する。胴上半部は球状を

なす。下半部は細まって脚台につくものとみる。口縁上部に櫛状具による刺突文を、頸部直下より器全面に櫛状具による羽状に鋭く条痕が施され、肩部に二段に3本単位の櫛描き平行線文がめぐる。2・3ともに弥生終末期の土器であり、東海地方よりの搬入品である。

弥生後期の石器は、中期にみた多量の出土と器種の多様性は激減を示し、大きな相違を来たしている。特に中期に多い耕起具とみる大形の打石斧一石鍬は1次調査に僅かみているが2次調査では皆無である。中期に僅かみられた浅耕具・草かき用具とみられる有肩扇状石器は座光寺原期でⅡ-10住が2分の1調査に終って不明である以外各住居址より1~3個の出土をみており、これが中島期になると1軒の住居址より1個の出土のみとなっている。

磨製石廔丁は座光寺原期で1次5個、Ⅱ次2個の出土があり、中島期では皆無であり、両側に抉りをもつ打製石廔丁は座光寺原期では1次に5軒7個の出土に対し、中島期では各住居址より1~5個の出土をみている。これにかわって座光寺原期では石廔丁とみる小形横刃形石器の出土をみている。

農耕具としての石器が弥生中期から後期への大きな変化、後期前半の座光寺原式と後半中島式とにみる相違は石器にかわる農耕具の出現・発達を考えるべきである。1次で2軒、Ⅱ次で2軒より各1個の砥石の出土をみており、これらは鉄器用のものである。1次調査では鉄片が7軒より出土をみており、木器の使用を裏付けるものと受けとめられる。

高松原には弥生後期座光寺原式を中心とした38軒の住居址とそれに付属する高床式建物址をもつ大集落の展開がみられる。高松原一帯は水田可能適地はなく、おそらく畑作物を中心とした農耕が営まれたとみる。中島式住居址の検出は5軒のみである。これらの多くは発掘区域の南側に発見されており、おそらく用地外の南に集落の中心があるとも予想される。しかし今まで飯田地方の(注2)発掘調査例では中島期集落が分散される傾向がみられており、次期古墳時代前半集落が沖積段丘面に集中することをみると、弥生時代から古墳時代への移行を示す弥生終末期の集落のあり方は今後さらに検討するべき課題であろう。

注1. 飯田高校・高松原調査団「高松原一本文書」1977.3
番井幸則「高松原遺跡」長野県史考古資料編主要遺跡(中・南信)

注2. 番木村教委「伊久間原遺跡Ⅱ」1980.2

V ま と め

高松原昭和58年度調査は昭和50・51年度飯田高校第二グラウンド造成の際実施された1次調査に引続きその西に隣接する何年か耕作を放棄し荒れ果てた桑畑1800㎡に飯田高校第二体育館が建設されることになり、これに先立って飯田高校の委託により上郷町教育委員会が受託して発掘調査を行ったものである。

この調査結果、縄文前期末・中期中葉初頭の住居址・土壇等が検出され、弥生時代後期の住居址が調査された。各期にわたる遺物には良好な資料の出土をみている。これらについては各項に記している。

縄文中期中葉初頭の格状式の遺構・遺物には高松原と同位段丘面にある高森町角田原遺跡の発掘調査例にみるものがあるが、飯田地方では数少ないものとして注目される。

弥生後期座光寺原式の大集落の存在は飯田地方におけるこの期の集落のあり方に大きな示唆を与えたものといえよう。中島式住居址の検出は少なく、集落の中心が用地外の南に中心を置くとも予想されるが、弥生終末期から古墳時代への移行期の集落のあり方は今後の究明さるべき課題である。

遺跡の立地は野庭川支流の谷頭浸蝕の終わる地点にあり、調査はその東側のみに終わっている。遺跡は地形的にみて西側に広がるものと予想される。しかし、その地域は飯田高校第二運動場造成後に飯田女子高校のテニスコート・弓道場が未調査のまま建設されたことは惜しまれる。

運動場・体育館建設により大半は破壊され、残る兩側の段丘縁部は宅地化が進み、遺跡の保存は危惧される状態にあるといえよう。残る部分に対する保護が要望される。

おわりに、本次調査にあたって飯田高等学校の示された御好意・御援助、地主の御理解があり、調査にあたっては岡田・片山・牧内調査員の方々の献身的な御協力、炎暑の続く真夏日のもと作業に尽された方々の熱心な作業態度があったことが大きな力となったことに深謝したい。

(佐藤 雅 信)

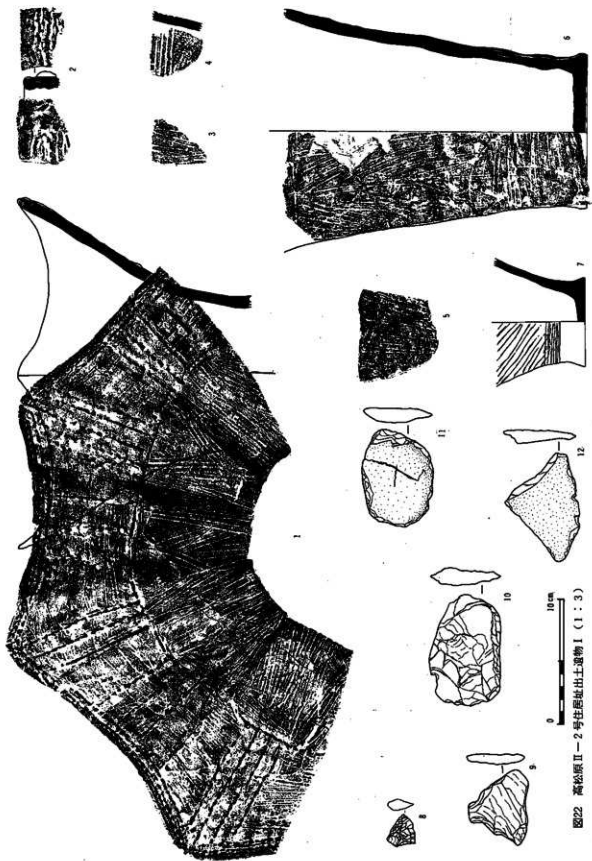


图22 高松原Ⅱ-2号住居址出土遗物Ⅰ (1:3)

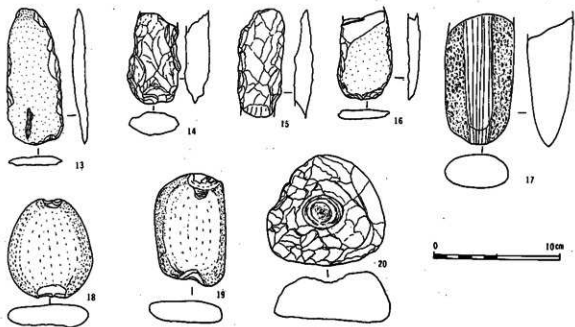


图23 高松原Ⅱ-2号住居址出土遗物Ⅱ (1:3)

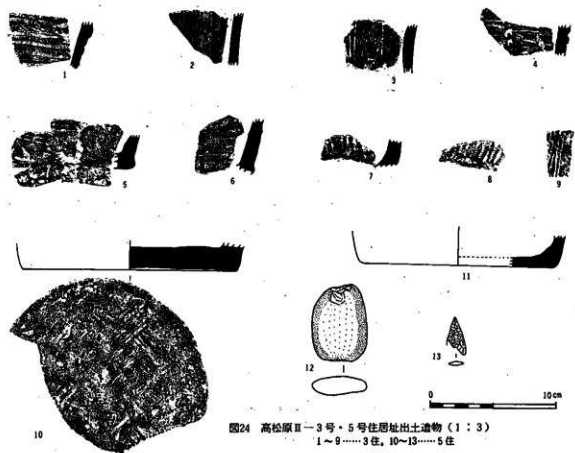


图24 高松原Ⅱ-3号·5号住居址出土遗物 (1:3)
1~9……3住, 10~13……5住

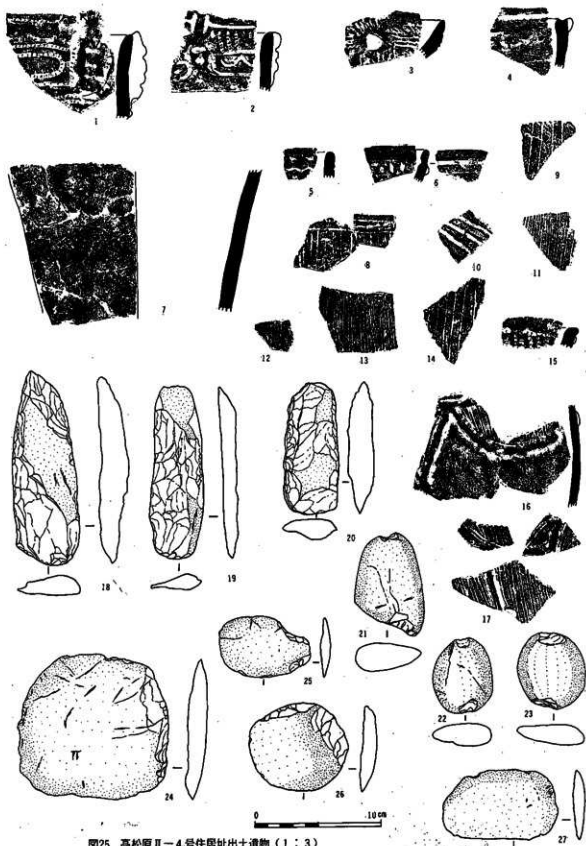
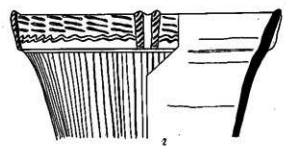


图25 高松原Ⅱ-4号住居址出土遗物(1:3)
16·17……住居址外,南侧C-1层出土



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



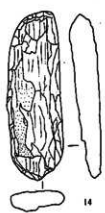
11



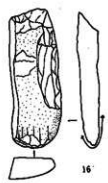
12



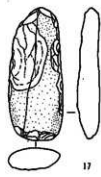
13



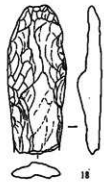
14



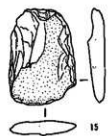
16



17



18



15

图26 高松原Ⅱ-11号住居址出土遗物I (1:3)



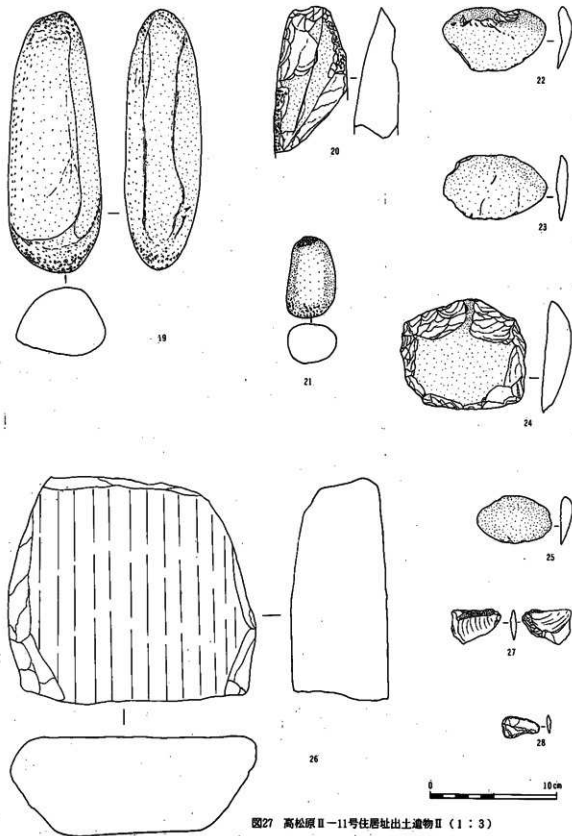


图27 高松原Ⅱ-11号住居址出土遺物Ⅱ(1:3)

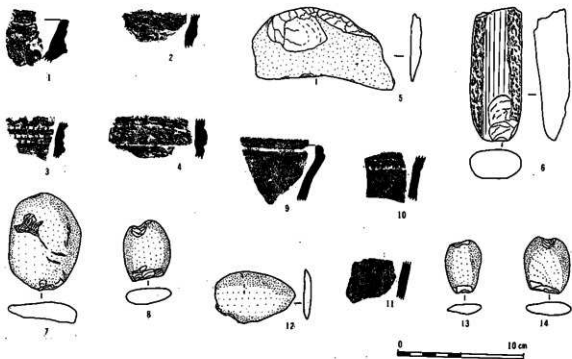


图28 高松原Ⅱ一住穴群Ⅰ・Ⅱ出土遺物(1:3)
1~8……柱穴群Ⅰ, 9~14……柱穴群Ⅱ

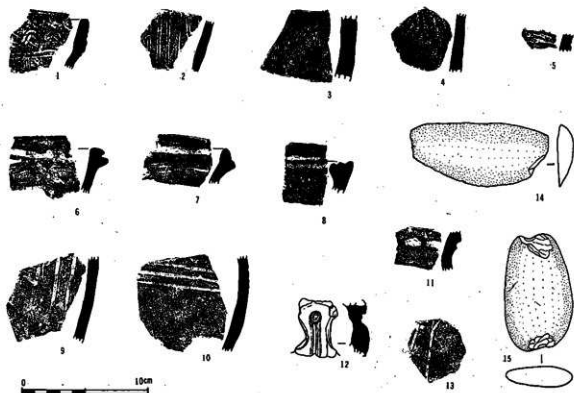


图29 高松原Ⅱ一土壙出土遺物Ⅰ(1:3)
1・2……土1, 3~5……土3, 6~15……土6

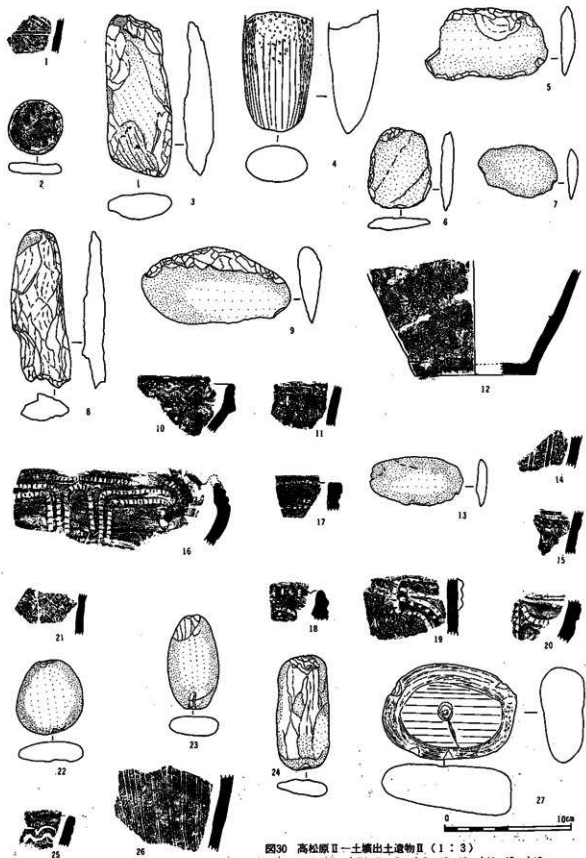


图30 高松原Ⅱ—土城出土遺物Ⅱ(1:3)
 1~7...±7, 8·9...±8, 10~12...±11, 13...±12,
 14·15...±13, 16~20...±14, 21~24...±15
 25~27...±18

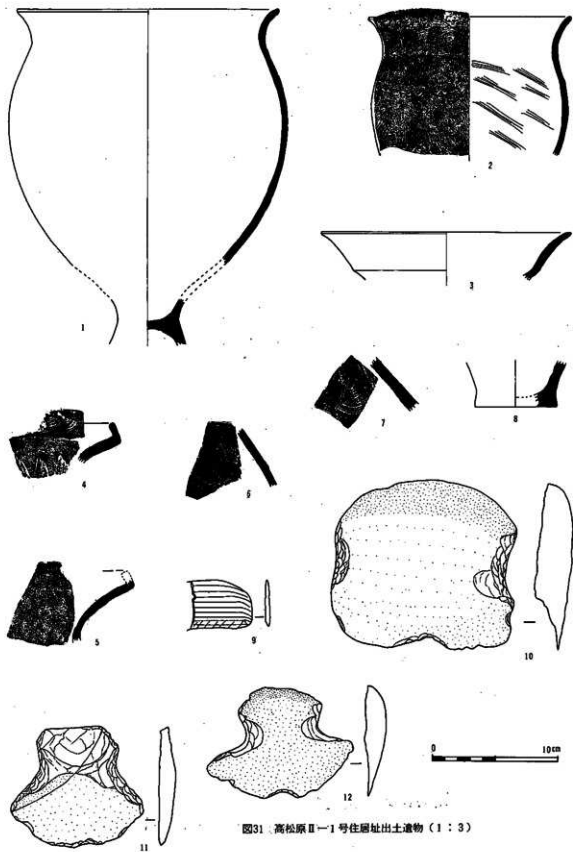


图31 高松原Ⅱ-1号住居址出土遺物(1:3)

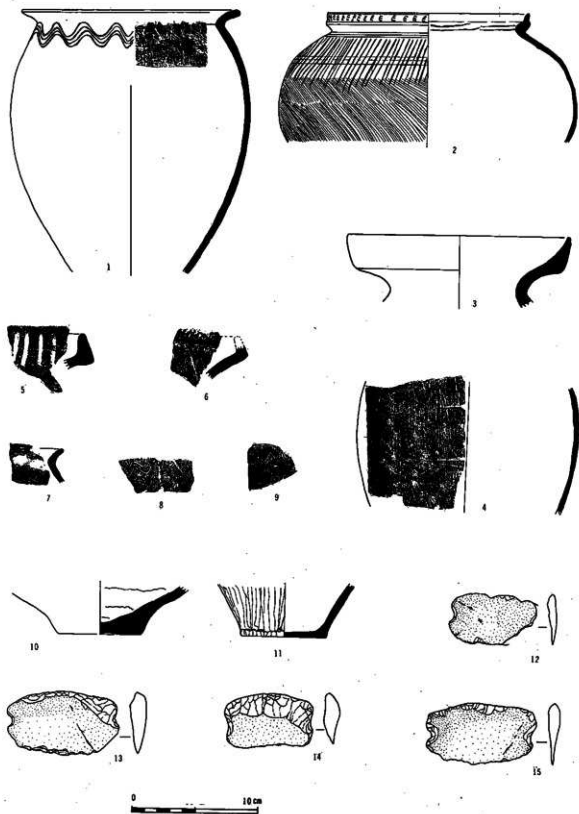


图32. 高松原Ⅱ-6号住居址出土遗物(1:3)

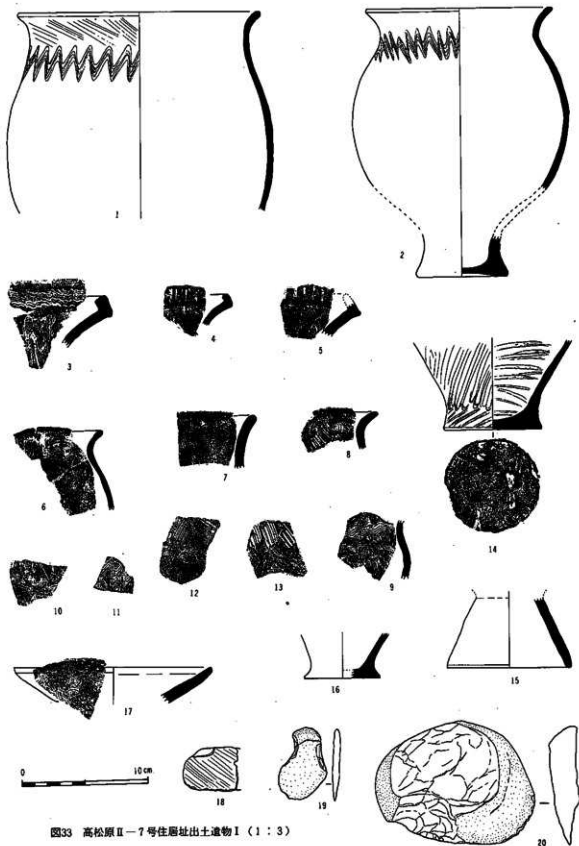


图33 高松原Ⅱ—7号住居址出土遺物I (1:3)

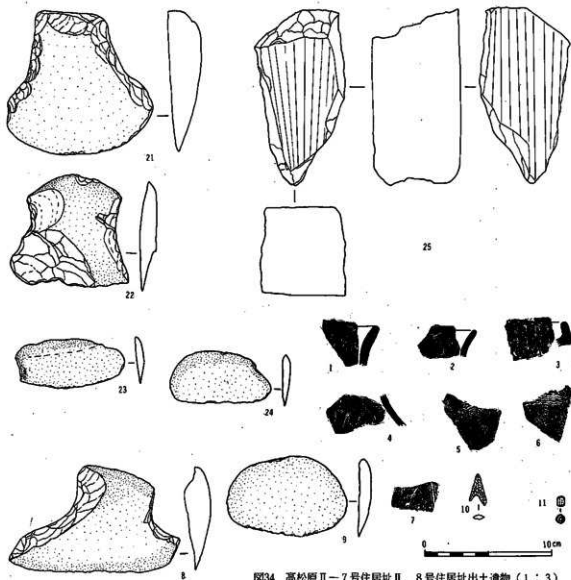


图34 高松原Ⅱ-7号住居址Ⅱ, 8号住居址出土遗物(1:3)
 . 21~25...7住, 1~11...8住, 11... (1:2)

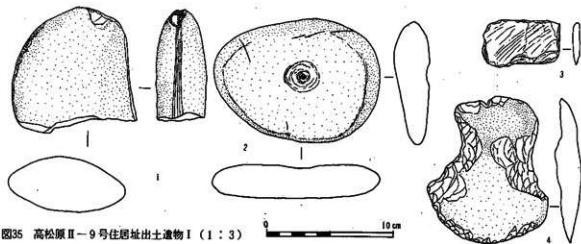


图35 高松原Ⅱ-9号住居址出土遗物I(1:3)

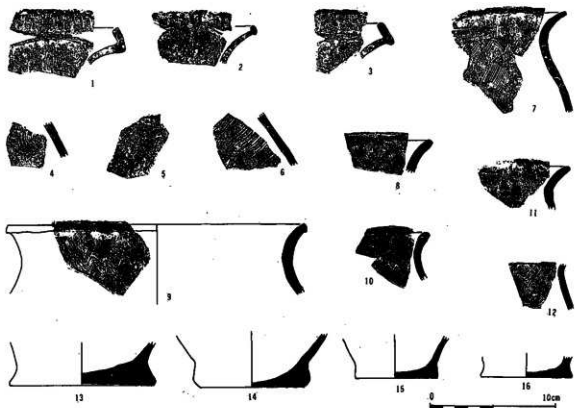


图36 高松原Ⅱ-9号住居址出土土器(1:3)

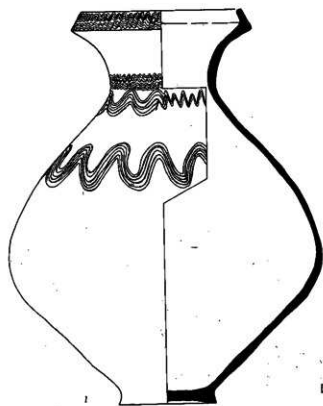


图37 高松原Ⅱ-10号住居址出土土器(1:3)

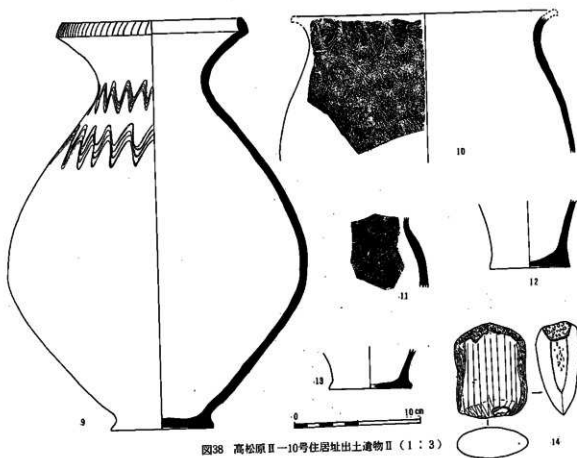


图38 高松原Ⅱ-10号住居址出土遗物Ⅱ (1:3)

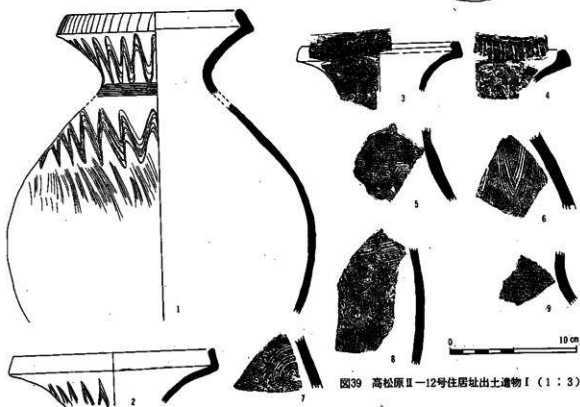


图39 高松原Ⅱ-12号住居址出土遗物Ⅰ (1:3)

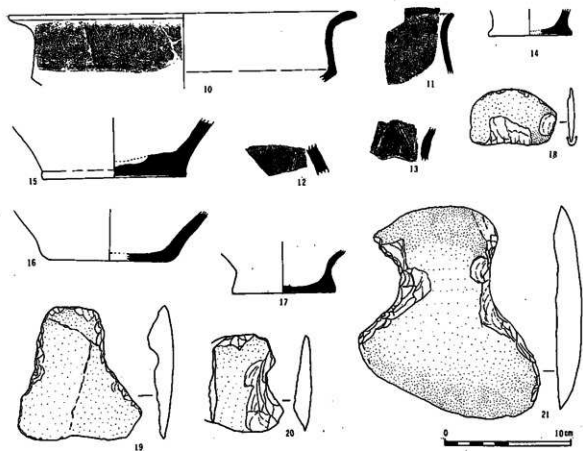


图40 高松原Ⅱ-12号住居址出土遗物Ⅱ(1:3)

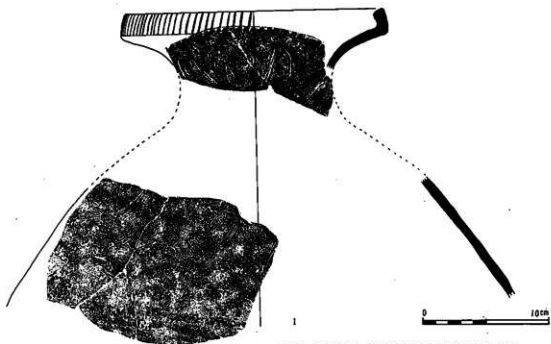


图41 高松原Ⅱ-13号住居址出土遗物Ⅰ(1:3)

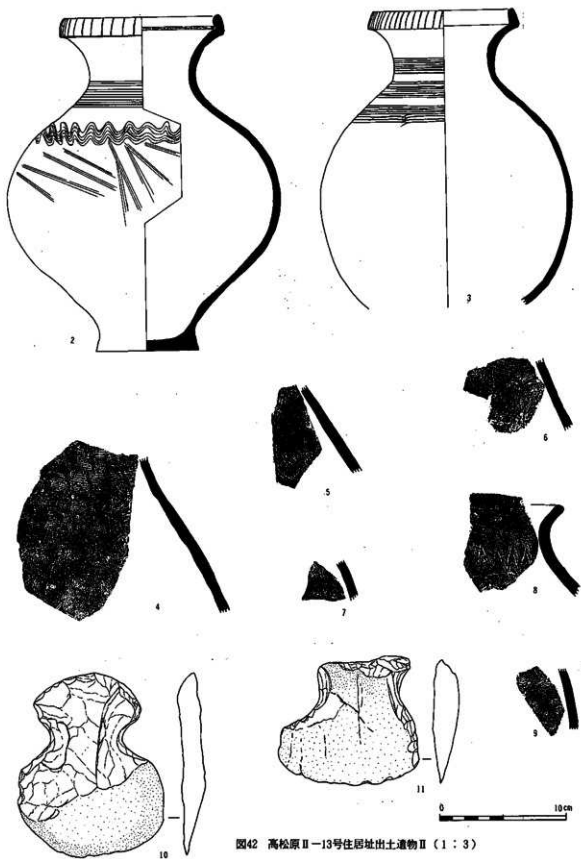


图42 高松原Ⅱ-13号住居址出土遗物Ⅱ (1:3)

図版I 遺跡



調査前の遺跡 — 北からみる



調査前の遺跡 — 南からみる

図版Ⅱ 遺構



遺構全景 — 北から



南からみた遺構群



南西からみた遺構群

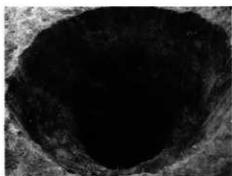
(I) 縄文時代住居址



2号(下)・3号(上)住居址
— 南から 右上土2号, 下は土3号



3号住居址炉址上部



2号住居址内土坑5号 土器出土



2号(上)・3号(下)住居址 — 北から



4号住居址



4号住居址 炉壁の調査



5号住居址



11号住居址

(II) 弥生時代住居址



1号住居址



6号住居址



6号住居址 欠山式土器の出土



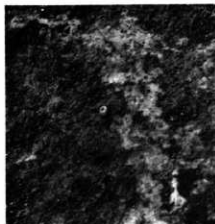
6号住居址 炉甕の調査



7号住居址



8号住居址



8号住居址 ガラス小玉出土



9号住居址



10号住居址



10号住居址 壺出土状況



12号住居址



12号住居址 有有扁状形石器出土



13号住居址覆土の状態 右下は土壘20号



13号住居址 北東からみる 左は土20号



13号住居址 西からみる



13号住居址 火災による焼木の倒れ

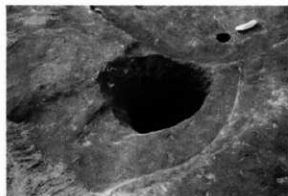


13号住居址炉址（枕石のかわりに土器片を立てる）

(Ⅲ) 土壇・柱穴群



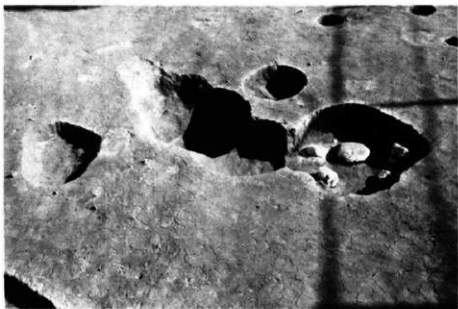
柱穴群と土壇群 (中央住居址は8号住)



土壇 6号



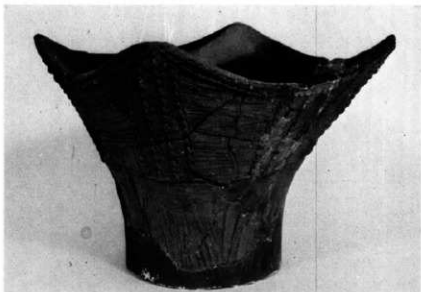
土壇 17号



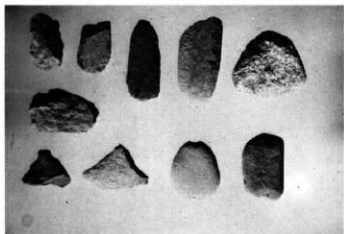
土壇 7号 (右)・15号 (中)・8号 (中左)・14号 (中上)・16号 (左端)

図版Ⅲ 遺物

(I) 縄文時代



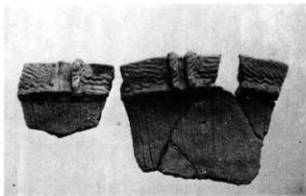
2号住居址出土深鉢（前期末）



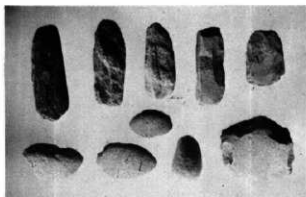
2号住居址出土石器



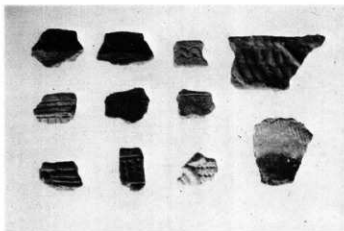
11号住居址出土浅鉢（中期）



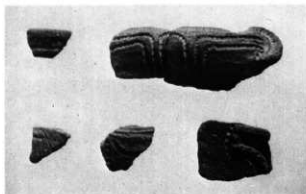
11号住居址出土深鉢（中期）



11号住居址出土石器



11号住居址出土土器（中期）



土壇14号出土土器（中期）



土壇6号出土土器・石器（後期）

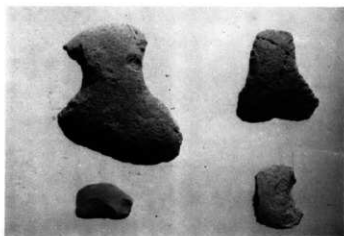
(II) 弥生時代後期



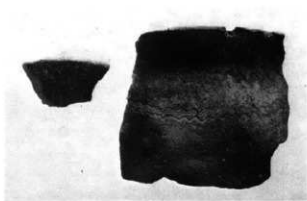
10号住居址出土壺形土器



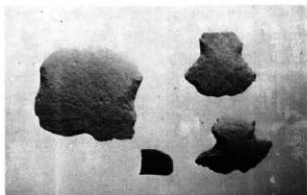
10号住居址出土壺形土器



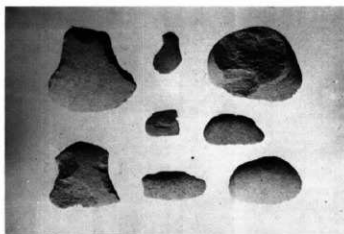
12号住居址出土石器



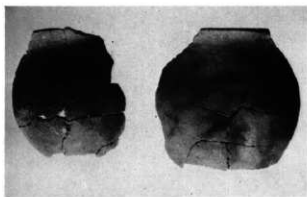
1号住居址出土土器



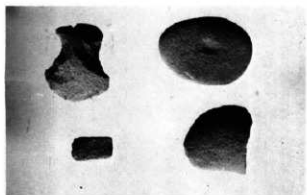
1号住居址出土石器



7号住居址出土石器



7号住居址出土土器(甕)



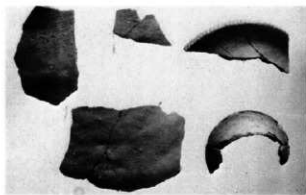
9号住居址出土石器



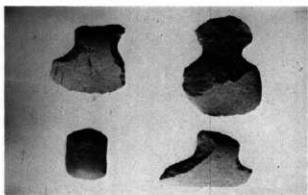
13号住居址出土壶形土器



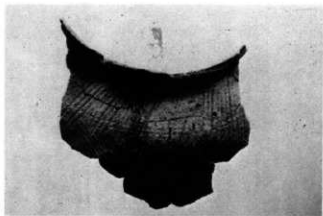
13号住居址出土土器



13号住居址出土土器



13号住居址出土土器 (下左10住・下右8住)



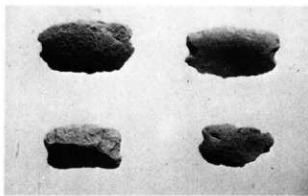
6号住居址出土土器（弥生最終末）



6号住居址出土土器（弥生最終末）



6号住居址出土土器（如甕）



6号住居址出土石器

図版IV 発掘スナップ



グリッド調査にかかる



北端部のグリッド調査



グリッド調査を終わる



遺構調査



遺構調査

VI 調 査 組 織

1. 高松原遺跡調査委員会

下 井 稲 穂	上 郷 町 教 育 委 員 会 委 員 長	
岡 田 道 人	同 委 員	
下 平 倫 訓	同 委 員	
北 原 忠 夫	同 委 員	
関 島 昌 平	同 教 育 長	
小 木 曾 英 壽	文 化 財 保 護 委 員 会 委 員 長	
牧 野 光 弥	同 委 員	
麦 島 正 吉	同 委 員	
稲 垣 隆	同 委 員	
三 浦 宏	県 立 飯 田 高 等 学 校 校 長	
東 原 三 寅	同 事 務 長	

2. 調 査 団

佐 藤 豊 信	日 本 考 古 学 協 会 会 員
岡 田 正 彦	"
片 山 徹 子	長 野 県 考 古 学 会 会 員
牧 内 住 子	"

3. 顧 問

大 沢 和 夫	長 野 県 考 古 学 会 会 長
指 導	長 野 県 教 育 委 員 会 文 化 課

4. 事 務 局

関 島 昌 平 (教 育 長)	池 田 丈 夫 (学 校 教 育 係 長)
今 村 賢 一 (教 委 事 務 局 長)	大 藏 豊 (公 民 館 主 事)
篠 田 公 平 (社 会 教 育 係 長)	林 惠 津 子 (教 育 事 務 局)
渋谷 哲 郎 (社 会 体 育 係 長)	樺 原 勝 子 (社 会 教 育 指 導 員)

5. 作 業 員

福 島 明 夫	北 村 重 実	大 島 利 夫	松 下 真 幸
木 下 辰 夫	竹 中 寿 夫	吉 沢 文 三	森 章
細 田 七 郎	向 田 一 雄	今 村 春 一	吉 川 正 美
関 島 安 雄	菊 本 正 義	吉 川 唯 男	橋 爪 忠 吉
島 岡 吉 次	吉 川 紀 美 子	牧 野 弥 寿 子	篠 田 修
服 部 靖 之	野 沢 稔		

遺物整理・製図

佐 藤 いなゑ

田 口 さなゑ

お わ り に

昭和58年度において県立飯田高等学校の第二体育館が同校の隣接地に施工されることが本決まりとなり事前に学校当局及び県教委文化課担当主事の現地協議を経て、昭和58年6月25日付にて文化庁に対し発掘通知し、7月1日学校との委託契約締結後、7月22日、調査委員会及び調査団を編成、調査委員長に下井稲穂町教育委員会委員長を選び、調査団長に佐藤勉信、調査員に岡田正彦、片山徹、牧内住子の諸氏を委嘱し、7月26日より発掘調査の作業に着手しました。

今回の事業費は4,000,000円で全額学校側の負担とし、上郷町教育委員会が受け直轄事業として行ったところ調査記録保存事業の成果は本書記述の通りであります。飯田高校を中心とした、この高松原は古くから町内有数の遺跡として注目されている所だけに、調査は慎重に進められ、炎暑の続く真夏日の太陽のもと、調査団・作業員の御苦労には大変なものがありました。幸い時あたかも飯田高校野球チームの健闘に励まれ、ほぼ予定通り発掘作業を終え今日まで佐藤団長の献身的な御努力により報告書の刊行に至りました。

この間調査団の各先生方の経験豊かな御指導と御協力、学校・地権者の方々の御理解、適切な御指導を賜りました顧問の大沢先生、県教委文化課の指導主事の先生方の御援助に厚い感謝の意を表するものであります。

また、発掘及び遺物等の整理に当たられた皆様方の御協力にも、本誌上から厚くお礼申し上げる次第であります。本書に収められた記録保存というふさわしい充実した内容は今後の考古学研究に大きく貢献し得るものであることと確信致しております。

昭和59年3月

上郷町教育委員会
高松原遺跡調査委員会

高松原Ⅱ

1984・3

発行 長野県立飯田高等学校
長野県下伊那郡上郷町教育委員会
印刷 株式会社 秀文社
